

---

# 夕凧

スピカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕凧

### 【Nコード】

N0401T

### 【作者名】

スピカ

### 【あらすじ】

主人公は将来が見えない高校3年生。高校最後の夏休み前日、主人公はクラスメートに「叶えたい夢があるから、田舎に行かない？」と誘われる。乗り気ではなかった主人公だが、親友の勧めもあって、行くことを決意する。

生まれて初めて体験する田舎の農家の生活。その生活の中で、凧とオリンは、美夕の夢である「空を飛ぶこと」を叶えるために、人力飛行機を作る手伝いを始める。

「夕風」

目を開けると、青空が広がっていた。そこには鳥も雲もない、群青一色の青。まさに群れる青だ。空を眺めたのは久しぶりだ。ぼんやりしながら上半身を起こすと、今度は草原が目映った。涼しい風が駆け抜けると、草原は音を立てて波打った。初めて聴く風の音と草の声。

草原の向こうには水平線が広がっている。これも初めての風景かもしれない。海を見たことは何度もあるけど、その時に、何が見えたのか覚えていない。何も思わず、何も感じず、ただ見ただけ。

空を眺め、草原を眺め、水平線を眺める。見るではなく、眺める。どうしてそんなことができるのだろう……。高校3年の夏という、忙しくて、大事な時期に、俺はどうしてそんなことができるのだろうか。

再び風が草原を駆け抜けた。俺は草原を見ようとして視線を下ろした。草が風と戯れるように揺らめいている。そんな光景を見て、俺は思わず口元を緩めた。

「平和だ……。時がゆっくり流れている」

だからなのかもしれない。見るではなく、眺めることができるのは。

俺がどうしてここにいるのか。それは高校生活最後の、夏休みの前日、終業式の日のことだ。

教室に終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。その音を合図に、

教室が一斉に騒がしくなった。カバンを持ってさっさと帰る者、後ろを向いておしゃべりを始める者、携帯を取り出し、素早く指を動かしている者。皆それぞれだった。

夏休み。その言葉とは裏腹に、俺は憂鬱な気持ちだった。

「高校最後の夏休みだな。お前何すんの？」

机に頬杖をつけてボーっとしている俺に話しかけてきたのは、子供の頃からの親友のオリン。フルネームは「夏野 オリン」名前で分かれるとおり、ハーフだ。

「さあ？」

「さあ、って何だよ？遊ぶとか、勉強するとか、就職活動するとか、色々あるだろ？」

「まだ将来のこと決めてないんだって」

俺は高校最後の夏にもかかわらず、進路を決めていなかった。と言うより、決められないでいた。この先の人生をどうするのか、その答えを18歳で出すなんて酷なことだ。そう思えて仕方ない。

「お前は？将来どうすんだよ？」

俺の問いに、オリンは腕組みをした。

「オレも決めてない」

自信を持ってそう答えたオリンが、俺は憎くなった。そしてその反面、どこか羨ましかった。

「偉そうに言うな」

オリンの自信の根源を、俺は聞こうとしなかった。

「凧、そう焦んなよ。お前、今にも自殺しそうな顔してんぜ？」

凧とは俺の名だ。「凧間 凧なぎ」それが俺の名前。

「焦らない方がどうかしてる」

俺がそう言うと、オリンは溜め息を吐きながら両手を小さく掲げた。洋画でよく見る仕草だ。オリンは、俺の前の席の椅子を、音を立てて引き、鼻で息を吐きながら座った。

「18年しか生きていない人間に、将来の答えを出せって言う方が間違ってる」

オリンは俺の肩に手を乗せて優しく揺すった。

「答えを出せる奴もいるけどよ、出せない奴だって沢山いる。別に命取られるわけじゃねえんだ、もう少し楽しく生きようぜ」

オリンは俺の肩に軽くパンチした。

「そうだな・・・そうだよな」

少しだけ、気持ちが悪くなった気がする。

「凧、お前はもっと知らなければいけない。どんな生き方があるのか、をな」

オリンの言葉に、俺は感銘を受けた。この言葉は、親も教師も教えてくれない言葉だった。俺は少し笑った。今日始めての笑顔だ。

「おお、それぞれ、忘れんなよ？今の顔」

オリンはそう言って、笑いながら俺のわき腹を突っついてきた。

人気の少ない教室に、脳天気な笑い声が響き渡った。

「楽しそうね、何してんの？」

じゃれあっている俺たちに興味を示したのが、一人の女子が声をかけてきた。その女子の名前は「大空 美夕みゆ」このクラスの委員長だ。統率力があり、気が強い性格をしている。女子はもちろん、男子からも人気がある。

「別に、高校生らしく楽しんでたのさと、オリン。」

「馬鹿笑いしているだけにしか見えなかったけど？」

「高校生らしいだろ？」

「ん、まあそうかもね。それより・・・」

美夕は俺の机に両手をついた。そして黙ったまま俺とオリンを交互に見た。

「・・・何だよ？」

俺は美夕独特の威圧感を感じ、気圧されてしまった。

「二人とも、夏休みはどうするの？」

「決まってない。オレも凧もな」

俺は声を出さず、頷いて答えた。

「そう・・・よかった」

そう言つと、美夕は小さな笑顔を見せた。そして机から手を放し、腰に手を当てた。

「ねえ、暇なら出かけない？」

「はあ？」

想定外の言葉に、俺は動揺した。

「何処に？」

オリンはいたって普通に質問した。当たり前前の質問だ。動揺する俺の方がどうかしている。

「私のおじいちゃんの家。おじいちゃん、おばあちゃんと旅行に行くんだつて。それで夏休みの間、私が留守番をすることになったんだ。一人だと退屈しそうだし、よかつたらどうかなあ、と思つてね」

一人での留守番は退屈。それは分かる。けど普通、クラスメートとはいえ男を誘つか？

「面白そうだな」

俺の思考とは反対に、オリンは美夕の話に食いついた。

「でしょ？二人となら退屈しないで済みそうだよ」

「それは約束する。な、凧？」

「ん・・・それは・・・まあ」

「凧、深く考えないでよ。別荘に行くような感じで誘つてんのよ？凧もオリンも変なこと考えてないでしょ？」

歯切れの悪い俺に、美夕は言葉を付け加えた。

「それは神に誓う」

オリンは右手をかざした。

「それは俺も誓う」

俺もオリンのように右手をかざした。

「それならいいじゃない。気に入らなかつたらすぐ帰つてもいいしさ。ね、行こうよ？」

俺はかざした右手を口元へ運び、どうするべきなのか考え込んだ。「行つてみようぜ、凧。環境が変われば、考え方も変わるかもしれ

ない。ただ悩むだけなら、自分の部屋じゃなくてもいいだろ？それに面白そうじゃねえか」

オリンの言うとおりかもしれない。この気持ちのままだったら、俺は夏休みの間、部屋の天井を眺めて過ごすことになりそうだ。それなら……。

「そうだな。行ってみようかな」

「よおし、決まりだ。オレたちも行くよ。で、いつから行くんだ？」

「急だと思っけど、明日から。始発電車で行くから、朝5時半に駅に集合ね」

「了解だ」

オリンは警察官のように敬礼をした。俺はオリンほど乗り気というわけではないが、環境を変えることはいいことかもしれない。そう考えることにした。

「分かった、5時半な。遅れずに行くよ」

「うん、楽しみにしてるよ。じゃ、また明日ね」

美夕はそう言い残し、カバンを持って教室を出て行った。

「オレたちも帰ろうぜ」

「そうだな」

俺とオリンも教室を後にした。

部屋に入ると同時にカバンを投げ捨てる。制服から普段着に着替え、テレビをつけ、ベッドに座る。いつもどおりの一連の動作だ。テレビをつけたとはいえ、真剣に見るわけではない。音と光が欲しいだけだ。

しばらくした後、俺はベッドに横になり、テレビに背を向けて目を閉じた。そして自分の未来を想像し始めた。近い将来、俺は何をしているのだろうか？

大学か専門学校に通うのか？

何のために？それが分からないのに、進学してもしようがない。じゃあ働くのか？

どこで？大体、世の中にどんな仕事があるのか分からない。求人雑誌を見たって、文面だけじゃ何も分からない。結局、俺は何がしたいんだ？

・・・分からない。

俺は毎日こんな思考の罫にかかっている。結末はいつも一緒。将来がない、将来どころか、明日も見えない。その答えに辿り着くと、俺は死の宣告をされたような気分になり、暗闇の世界に怯え始める。俺は悪い夢から覚めたように、凄い勢いで寝返りを打ちながら目を開けた。つけっぱなしにしていたテレビの青白い光が目に入った。その光を見ていると、乱れた呼吸と、荒ぶる心音が穏やかさを取り戻していった。

机の上に置いてある子機が一回だけ鳴った。夕食の合図だ。俺は額に手を当て、ゆっくりと深呼吸した。そして、額に当てた手で髪を撫で上げた後、居間に向かった。

食事中、母さんは俺に将来のことを聞いてきた。毎日のように聞かれる同じ質問に俺は「ああ」とか「いや」というように、一言で返していた。今日もそうだ。次第に会話が無くなっていき、テレビだけが頑張ってる状態になった。

夕食を食べ終えた俺は、ご馳走様を言う前に夏休みのことを話すことにした。正直、少し言いつらい。母さんに反対されるのが目に見えているからだ。

「夏休みのことだけどさ、友達から別荘に行かないかって誘われてるんだ。行ってもいいだろ？」

「何言ってるのよ？将来のことを考えるのが先でしょ？」

予想通り、母さんは反対した。父さんは黙って話を聞いている。

「考えないわけじゃないって。環境が変われば見えるものもあるか



もしないだろ？」

「そんな無責任なこと言わないでよ」

母さんは今にも泣き出しそうな声で言った。その声は、俺の胸に深く突き刺さった。

母さんはいつも俺のことを心配している。いつも俺に答えを求めている。けど、俺にはそれが苦しくて辛かった。

「風、お前の好きにすればいい」

俺と母さんの会話を黙って聞いていた父さんが、突然そう言い出した。

「ちよつと何てこと言っんですか。風には、今が一番大事な時期なんですよ？」

「それは分かってる。だが風はちゃんと考えると言っているんだ。それなら好きにさせてあげなさい」

父さんの静かな声に、母さんは言葉を飲み込んだ。

父さんは昔から俺のやることに反対しなかった。口を挟んでくることはあつたが、最近はそれもない。

父さんに視線を向けると、父さんは黙ってテレビを見ていた。その姿は「お前に興味がない」「お前には期待していない」そう言っているような気がしてならない。

「・・・」馳走様

俺は冷えた空間から抜け出そうとして立ち上がった。すると父さんが、

「風、手ぶらで帰ってくるなよ」

と、テレビを見ながら言った。

部屋に戻った俺は、何も考えないようにして、黙々と明日の準備を始めた。それが終わるとさっさと風呂に入った。そして、少し早いとは思ったが、寝ることにした。

ベッドに横になって目を瞑った俺は「父さんへの土産は地酒にしよう」「そう心の中で思い、眠りに落ちた。

早起きは三文の徳。誰もが知っている言葉だが、この言葉が真実なのかは誰が知っているのだろうか？朝の4時半、俺は寝癖を直しながらそんなことを考えていた。

レバーを回し、お湯から冷水に切り替えた。重い臉を全力で抉じ開け、視点の定まらない瞳に冷水を一気に浴びせる。心臓がチクチクと痛んだが、これも試練と思い、耐え続けた。

乱暴にバスタオルで頭を掻き回し、少し曇った鏡を見ながら手櫛で髪を整えた。まだ眠気は覚めきつていなかったが、時間を考えろと、熱いコーヒーを飲む暇はない。俺は急ぎ足で部屋へと戻り、荷物を持って家を出た。

家を出た俺はまず、オリンの家を目指した。駅までオリンと一緒に行くことになっているからだ。オリンの家は俺の家の三軒隣にある。近所中の近所だ。

あっという間に「夏野」という表札が目に入った。表札の掛かったブロック塀の奥には、立派な道場が建っている。

「・・・いつ見ても立派な道場だな」

そう呟くと、道場の玄関がガラガラと音を立てて開かれた。続いて中から、投げ捨てられた空き缶のようにオリンが放り出された。そして、オリンを追うように大きなポストンバッグも放り出された。

「くそ、化物め」

オリンは上半身だけを起こし、道場の中に向かってそう吼えた。

「まだまだ、だな」

粹な声と共に、道場の中から武道着姿の、オリンの親父さんが現れた。

「帰ってきたらボコボコにしてやるからな」

「面白い、やって見せる」

二人のやり取りを、俺は啞然として見ているしかなかった。

「凧君、うちの馬鹿息子を頼む」

「あ、はい」

俺は反射的にそう答えた。

「じゃあ行ってくる。親父も最後の夏を楽しめよ」

オリンは捨て台詞を吐きながらバッグを拾い上げた。そして俺の方へ。

「行くぞ、遅れると厄介なことになる」

「そうだな」

俺は美夕の顔を思い浮かべた。不思議と、足取りが速くなった。

「まったく、あの年であの強さだ。親父はモンスターに違いないぜ」

オリンの親父さんは格闘技の師範代だ。40代後半とはとても思えない体つきをしている。その親父さんに、オリンは毎日挑んでいるそうだが、一度も勝ったことはないらしい。

「親父のやつ、強すぎるぜ。お袋が惚れるのも無理ねえよな」

俺はオリンの母親を、一度だけ写真で見たことがある。とても美しい人だった。

オリンの親父さんは、その人と話をするためだけに英語を覚えたらしい。そして、オリンが生まれた。母親は、オリンを生んですぐに亡くなったそうだ。

親父さんは、亡くなった妻を想ったのか、オリンが幼い頃から英語を教えた。今でもそれは続いている。月、水、金、日は英語で会話をするのが夏野家の掟となっているらしい。

仲が悪いように思えるが、本当は父親と分かり合っている。

「凧、美夕の奴、先に着いてるみたいだぜ」

「そうみたいだな」

黄色に点滅している信号の先の、駅の前に美夕の姿があった。俺たちは足早に美夕のもとへと歩み寄った。

「遅いよ、何してたのよ？」

「遅いって、時間丁度じゃねえか」

オリンは駅にある大きな時計を指差して言った。

「待ち合わせは、5分前に来るのが常識でしょ？学校で習わなかった？」

「こんな所で委員長すんなよな」

二人とも、朝からとつても元気だ。確かに、退屈しないで済みそうだ。

「なあ、早く行こう」

もう少し、二人のやり取りを見ているのも面白そうだったが、乗り遅れたら本末転倒だ。そう思い、俺は二人を促した。

首尾よく切符を購入した後、人気のない駅の中を靴の音を響かせながら歩いた。シャッターが降りている土産屋の側を通り、階段を降る。すると、出発を待っている電車が、薄い朝霧の中に寂しそうに停まっていた。

誰もいない電車に乗り込み、荷物を上に載せ、席に座った。俺は窓際の席だ。

「どれ位で着く？」

俺は向いに座っている美夕に聞いてみた。

「そうねえ・・・6時間位かな」

美夕は持つてきていた小説の、栞を挟んであったページを開きながら答えた。

「そんなに？」

「だって、おじいちゃんの家は田舎にあつて、新幹線が通ってないんだもん」

田舎に行く。今初めて知った事実だ。行き先を尋ねなかった俺たちはどうかしている。

「別にいいじゃねえか。ゆっくり行こうぜ」

俺の隣に座っているオリンは、やけに落ち着いた声でそう言った。「寝てていいよ。着いたら起こしてあげるから」

「じゃ頼むよ」

オリンは早速目を閉じた。「俺も寝よう」そう思い、目を閉じた。程なくして、体で電車が動き出すのを感じた。

あれだけ眠かったのに、何故か眠れない。時々意識が遠ざかるのだが、すぐに戻ってくる。どれだけ時間が過ぎたのだろうか。そればかりが気になる。薄目で美夕を見ると、小説を読み続けている姿が薄っすらと見えた。横目でオリンを見ると、口を開けて深い眠りについていた。

次第に車内が賑やかになっていった。薄目で通路を見ると、制服姿の学生たちで埋め尽くされていた。お喋りをしている学生、布に包まれた竹刀を持っている学生、参考書を読んでいる学生など、様々だった。学生たちを見ていると、今の自分の現状が素早く頭を過ぎった。

俺は不快な気持ちに顔を歪ませ、強く目を閉じた。

次に目を開けた時、車内には静けさが戻っていた。立っている人は一人もいない。窓の外に目を向けると、田んぼと電柱と電線だけの景色が広がっていた。俺の住んでいる町は都会ではないが、田舎でもない。ほとんど町から出たことのない俺には、窓の外の景色がとても新鮮に見えた。俺は再び目を閉じた。

「起きて、もうそろそろ着くよ」

美夕の声がはっきりと聞き取れる。俺は結局、ほとんど眠ることが出来なかった。

「オリン、起きろよ」

肘でオリンを突つくと、オリンは低い唸り声を上げた。唸り声は欠伸へと変化した。隣に座っている俺に、お構いなしに背伸びを

するオリン。よほど気持ちよく眠れたのだろうな。俺は少しだけ、オリンが憎たらしくなった。

「意外に・・・早かったな」

「お前だけだよ、そう感じるのは」

程なくして目的の駅に電車は停まった。俺たちは荷物を降ろし、電車を降りた。

駅には俺たち以外誰もいない。駅員すらいない。無人の駅だ。

「やば、急ぐよ」

美夕は突然走り出した。俺とオリンは訳の分からないまま美夕に続いた。そしてそのまま、停まっていたバスに駆け込んだ。俺たちが乗り込むと、バスはすぐさま走り出した。

「こんなに慌てなくてもさ、次のバスに乗ればよかったんじゃないか？」

「分かってないねえ、ここは田舎なの」

美夕はそう言うと、さつきとは違う小説を取り出し、読み始めた。俺は窓を開けて、流れる景色を眺めた。田んぼが道路を挟んで続いている。ぽつぽつと民家が見えてきた。どの家も古風な作りで、隣の家との感覚がとても広い。

田んぼ道を抜けると、今度は並木道に差し掛かった。薄暗くなった道路に、セミの音が響き始めた。

「凧、何だか楽しくなってきたな」

俺の後ろの席からオリンの声が届いた。

「ああ、そうだな」

俺は木漏れ日に手をかざしながら答えた。今の言葉に、嘘偽りはない。

並木道を抜けると、今度は広大な草原が目に見え込んできた。

「スゲエ、海だぞ、海」

興奮した声でオリンが叫んだ。俺はその声に釣られて草原の向こうに視線を向けた。草原の端には、白い柵が立てられている。その向こうには、青々とした海が広がっていた。

俺は仄かに香る潮の匂いを思いつきり吸い込み、吐き出した。遠ざかる意識の中、オリンの歓喜の声と、波の音だけが俺の耳を支配した。

草原に出て5分位だろうか、俺たちはバスを降りた。

ベンチとバス停が仲良く並んでいて、その後ろには草原が広がっている。バス停は潮風のせいで酷く錆びていた。時刻表は日に焼けていて、白と薄いオレンジ色に変わっている。一文字も見えない状態だ。

「なるほどな、急いだ訳が分かったよ」

これでは次のバスがいつ来るか分からない。きつとどのバス停も同じような状態になっているのだろう。

「さ、行こう。10分位歩けば到着だよ」

俺たちは無言で歩き出した。

生まれた町しか知らない俺には、今歩いている所が異国のように思えた。何とも言えない気分だ。嬉しさと、達成感と、好奇心、それから不安も混じっている。初めての感覚に戸惑いながらも、俺は歩き続けた。

しばらくして、木の柵に囲まれた牧場が見えた。尻尾を振りながら、のそのそと歩いている牛を見つけた俺は、思わず声を出しそうになった。

「着いたよ、ここがおじいちゃんの家」

美夕はそう言って、牧場の奥にある赤い屋根の家を指差した。手摺りの付いた白いポーチに気が付くと、洋画に出てくる田舎の家が連想された。

三段しかない階段をミシミシと音を立てて上り、ポーチの上へ。

「ちよつと・・・待ってて」

美夕は鍵を取り出そうとバッグの中を探り始めた。俺はその様子を、手摺りに寄りかかりながら眺めていた。

「疲れたでしょ？今日はゆっくり休んで。私は家畜の世話をしてる

から、その間は自由にしていいよ。但し、7時に夕食にするから、それまでに戻ってきてよ」

「分かった、7時5分前だな？」

オリンは皮肉っぽく言った。

「ん、よろしい」

鍵を探し出した美夕は慣れた手つきでドアを開けた。その瞬間、俺とオリンは荷物を家の中に放り込んだ。

「あ、ちよつと、」

美夕が少し怒った声で何かを言いかけた。それと同時に、オリンは逃げるように走り去っていった。「俺だけ怒られるのも嫌だ」そう思い、オリンの後を追うように俺も走り出した。

「オリンの奴・・・何処へ行った？」

荒れる息を整えながら辺りを見渡したが、オリンの姿は見えなかった。

「相変わらず足が速いな・・・まいつか」

俺は草原に仰向けで寝転んで、大の字を描いた。雲のない空を見上げると、平穏な時間に包まれた。

涼しい風が、汗ばんだ頬を優しく撫でた。草が風になびく音が聞こえると、俺は必然的に目を閉じた。



風のように、雲のように、気ままに漂い流れたい。

ここで目覚めて、感じた素直な気持ち。聞こえはいいかもしれないが、実際はただの逃げ文句だ。それは分かっている。けど、もう少しだけ、開放させてほしい。崖越しの海を眺めながらそう自分に願った。

2

「風、ここにいたのかよ。てっきり美夕に捕まったと思ったぜ」

オリンの声に振り返ると、信じられない光景が飛び込んできた。その光景に、俺は思わず仰け反った。

オリンは上半身裸だった。割れた腹筋に、盛り上がった胸筋、見事な体つきだった。しかし、驚いたのはそこじゃない。オリンはいのししを引き連れていたのだ。

「おおい何だよそれえ」

「こいつか？オレの戦友だ」

オリンは親指でいのししを指差して言った。

「おいふざけんなよ、答えになってないぞ」

いのししに睨まれた俺は、退きながら言った。

「そんなにビビんなよ」

「無理だつて」

それほど大きくはないが、野生の動物だ。本能で襲ってくるかもしれない。

「森の獣道に行ってきたんだ。そこで襲われたんだよ。格闘の末、オレはこいつの額に必殺パンチを叩き込むことが出来た。よく言うだろ？拳を交えると分かり合えるって。動物も例外じゃないぜ」

よく見ると、いのししの額の部分の毛並みが、ミステリーサーク

ルのように螺旋を描いていた。コークスクリューで仕留めたのか？

「ほ、本当に大丈夫なんだろうな？」

「心配すんな、ちゃんと行って聞かせる」

「飼うつもりかよ？」

「まあな」

あっけらかんとした声を聞いた俺は、溜め息をつきながら顔に手を当てた。

「二人で何してんの？」

作業着を着た美夕が、何処からともなく現れた。

「いのししじゃない。何処から連れてきたのよ？」

「裏の森の獣道だ」

オリンは崖の反対側を指差した。

「あの森にはね、入っちゃいけないの」

「そうなのか？」

「そうなの。言わなかった私が悪いんだけど、もう行かないでよ」

「悪かった、もう行かない」

オリンは素直に反省した。こういう奴なんだよな。

「でも丁度良かった。食料を調べたら、野菜と果物とチーズしか残ってなかったんだ」

「お、おい美夕、何言ってるんだ？食うつもりかよ？」

「そうよ、それが自然の掟だもん」

美夕は涼しい顔で言った。

「さあ・・・いらつしやい」

美夕はいのししの顎を撫でながらそう言った。そして家に向かって歩き始めた。いのししは美夕の顔を見上げながら、美夕の後を追った。

「何て・・・」

「おっかねえ女だ・・・」

食卓には美夕の手料理が並んでいる。俺とオリンは、皿に盛られた肉料理を無言で見下ろしていた。

「さあ食べましょう。いっぱい食べてよ」

「・・・ウリ坊」

オリンは肉料理を見ながら、悲しそうに呟いた。

「安心してよ、これは豚肉だから」

「本当か？ウリ坊はどうした？」

「森に帰したよ」

「そうかそうか。これで飯が食える」

オリンは箸を持ち、食事を始めた。

「二人ともよく聞いて」

美夕は箸を置いた。俺とオリンもそうした。

「野生の動物を、人の住処に連れてきてはいけないの。人に慣れたら、動物は森を出て穀物を荒らすようになるの。それがどれ程農家にとって大変なのか分かって」

「ごめん、悪かった。反省する」

オリンは深々と頭を下げた。

「人と動物の共存っていうのは、一緒に暮らすことだけじゃないの。互いの住処に踏み入らないことも一つの共存。私はそう思うよ」

自分の考えを持っている美夕が、とてもカッコ良く見えた。そんな美夕を見ていると、何も考えていない自分が情けなく思えてしまふ。

「それから「捕まえたいのししを殺して食べる」そう聞くと残酷に思うでしょうけど、今食べている豚肉だって、誰かが育てて、誰かが殺したものだよ。それも分かって」

オレは今まで、鳥や豚や牛を当たり前のように食べてきた。でも、肉を食べるといふことは、そこに動物の死があるということ。俺はそれを考えたことがなかった。自分の手を汚していないからだ。

「美夕のおかげで気が付くことが出来たよ」

「オレもだ、ありがたく食べるよ」

俺とオリンは改めて「頂きます」と言った。

「食べ終わったらいい物見せてあげるから、楽しみにしてて」

「いい物って？」

「私の夢」

美夕はそれ以上言わなかった。「夢」という言葉に、俺の興味は強く惹きつけられた。

外へと繋がっているドアを開けると、夜の草原が虫の声を従えて迎えてくれた。ドアを通り抜け、白いペンキが剥がれかけている板の上を、ゴツゴツと音を立てて一歩二歩と踏み出した。

「草原に星の海、澄んだ空気と虫の声。悪くないな」

オリンは手摺りの上に両肘を乗せて感慨深く言った。

「何してんの、置いてくよ」

「今行くよ」

俺は小走りで美夕の後を追った。オリンは手摺りを飛び越え、俺と同じく美夕の後を追った。

美夕は家の裏の方へと歩いていく。後を追う俺は、一台の車に目を惹かれた。洋風の、荷台が長いトラックだ。砂埃をかぶっていて、草臥れた感じの哀愁が漂っている。荷台にはわらが敷き詰められていて、思わず飛び込みたくなる気を起こさせる。

俺は名残惜しい気持ちを抑え、美夕の後を追った。美夕の向かう先には大きな・・・納屋と言うか、小屋と言うか、ガレージと言うか、とにかく、二階建てアパート位の高さの建物が建っていた。

美夕はその建物の前に来ると、身を屈め、何やらガチャガチャと音を立て始めた。そっと覗き込むと、大きな南京錠を外しているのが分かった。

「よし、はずれた」

鍵をはずした美夕は、力いっぱいトタンでできた扉を引き始めた。錆びた鈍い音が夜の草原に木霊した。

「ちよっと、見てないで手伝ってよ」

「お、おう」

俺とオリンも加勢してドアを引き開けた。人が楽に通れる位にドアを開けると、中から何とも言えない不思議な匂いがしてきた。美夕が中に入ったので、俺とオリンも続いた。

窓から差し込む、僅かな月明かりだけでは中がよく見えない。目を凝らして辺りを見回すと、大きなシルエットが闇に溶け込んでいるのが分かった。

「今明かりを付けるから、驚いてよね」

美夕は嬉しそうに言った。

カチッとスイッチを切り替える音が聞こえると、天井にぶら下がっている幾つもの裸電球が輝きだした。突然の明かりに目を細めながらも、俺はシルエットの正体を見極めた。

「おい、これってよ、飛行機、だよな？」

オリンは興奮を抑えながら言った。

「そう。正確には、人力飛行機」

建物の中は教室6個分位の広さで、見たこともない工具や資材が置いてあった。そして、作りかけの人力飛行機が眠っていた。

人力飛行機は、まだ骨組みの部分も多く、プロペラも付いていない。しかし、その様子こそが、心をくすぐる役目を担っている。

「これ、飛ぶのか？完成したら飛ぶのか？」

オリンはさつきよりも興奮した声で言った。

「もちろん。ちゃんと計算して作ってるよ」

「スゲエじゃんか。頭いいのは知ってたけどよ、こんな物作っちゃうとはなあ」

「まだ作り掛けだってば」

「いいや、俺には見えるぞ。完成したこいつが空を舞うシーンがな」今のオリンは「未知なる物を目の当たりにした少年」のように見える。

「私の夢は、おじいちゃんの牧場を継ぐこと。でもそれだけじゃな

い。空を飛ぶことが、私のもう一つの夢。ここまで作るのに2年掛かったけど、後一息。どうしても高校を卒業するまでに空を飛びたい。それができたら、私はもう一つの夢に専念できる」

美夕は自分の将来を持っていた。それがたまたまなく羨ましかった。焦らずにはいられない。

「ねえ、空を飛ぶ夢、手伝ってくれない？」

「勿論だ。こつちから頼みたい位だぜ。是非やらせてくれよ。凧、お前もやるだろ？」

「・・・ああ」

俺はオリンほど乗り気ではなかった。自分の将来が見えていないのに、人の夢を手伝う気にはどうしてもなれない。だからと言って断れない。それが、今の正直な気持ちだ。

「ありがと。本当に助かるよ」

美夕の心の底からの感謝に、俺の胸は痛んだ。

「オレも一緒に夢見させてもらうぜ」

「作業は明日からにして、今日はゆっくり休みましょう」

美夕はスイッチを切り、電気を消した。飛行機はシルエットに変わり、再び闇に溶け込んだ。

「凧、起きてるか？」

床について2時間位だろうか、興奮して眠れない様子のおリンの声が耳に届いた。

「起きてるよ、どうした？」

「楽しみで眠れねえ。こんな気持ちは久しぶりだ」

「俺も眠れないよ」

俺は思考の罫に掛かかって眠れない。悪い癖だ。逃げようにも逃げられない。振りほどこうにも振りほどけない。しっかりと捕まえられた俺に、なす術はない。

「美夕の奴、ちゃんと自分の道を見つけていたな」

「・・・そうだな」

「カッコいいよな」

「・・・そうだな」

俺は妬む気持ち在必死に抑えていた。これ以上、落ちぶれたくない。

「何かさ、変な気持ちだ」

オリンは寝返りを打ちながら言った。

「惚れたのか？」

気を紛らわせようと、俺は冗談でそう言った。

「そうなんだよ」

意外な答えに、俺は上半身を凄い勢いで起こした。

「・・・マジ？」

「マジだ。前から少し、気にはなっていたんだ。けど今日ハッキリ分かった。オレは美夕に惚れている」

俺は鼻で息を吐きながらゆっくりと上半身を寝かせた。

「だから全力で夢を叶えてやりてえ」

オリンは再び寝返りを打った。

「オレも空を飛んでみたいしな」

オリンはそう付け加えると、静かに息を吐き出した。

最後の会話から1時間位たっただろうか。オリンから安息の吐息が聞こえてきた。オレに安息が訪れるのは、一体いつだ？

金属を叩く鋭い音が寝室に響いた。何度も何度も必要に鳴り続けている。あまりの驚きに身を小さくして耳を塞いだ。混乱する頭で想像できたのは、戦時の空襲だった。

「ほら〜起きなさい」

音は鋭さを増し、俺に突き刺さってきた。空襲だろうと何だろうと、起きなければ俺には死が忍び寄るだろう。

俺は勢いよく飛び起きた。ぼやけた視界に映ったのは、お玉で鍋を

叩き続ける、エプロン姿の美夕だった。

「まだ続けようか？」

「起きた起きた、起きたってば」

寝室に静けさが戻った。俺はゆっくりと息を吐いた。生の実感が全身を駆け巡った。

「本当にこんな起こし方をする奴がいるとは思わなかったぞ」

俺は左手で顔を擦り、掠れた声で言った。

「一度やってみたかったんだ」

爽やかな声の美夕。心が満たされたからだろうか？

「俺で試すなよな・・・」

そう言いながら、壁掛け時計に目を向けた。時計の針は7時5分前を指している。

「まだ7時じゃないか」

「牧場の朝は早い。7時でも寝坊なんだから」

俺は農家には向いていないようだ。それが分かっただけでも、来た意味はあるな。

「もう少しで朝ごはんできるから、顔洗つといでよ」

美夕の声は聞こえていたが、頭には入っていなかった。ボーっとしながら辺りを見回すと、オリンがいないのに気が付いた。

「・・・オリンは？」

俺の声はまだ掠れている。

「とつくに起きたよ。ランニングに行くって出るって出ってたよ。毎日の日課なんだってさ。少しは見習いなよ」

「はいはい」

俺が頭を掻いていると、美夕は寝室を出て行った。美夕がいなくなると、ここぞとばかりに睡魔が手招きし始めた。優しく抱き留めてくれそうだが、時計の秒針がガチガチと音を立て、それを阻止している。

「電池抜くぞ」

そう吐き捨てた後、俺は洗面所に向かった。



「頂きます」

俺もオリンも、昨日のことを忘れていない。そんな声だ。

「変わった味のする牛乳だな」

「牛乳じゃなくて、ヤギの乳。搾りたてよ」

「どうりで温いわけだ。」

「このチーズも自家製か？」

「と言ってパンにチーズを塗るオリン。「どっちがパンだ？」と思うほどに厚みがある。」

「そうだよ。他にも、ヨーグルトや牛乳豆腐も作ってるよ。」

「そりゃ凄い。いい仕事してるぜよ」

良くも悪くも、いつものオリンだった。自分の気持ちを知っても態度を変えていない。

「確かに美味しいよ」

オリンを見てみると、不思議と素直になれた。

「でよ、今日から何をすればいいんだ？食ったらすぐに作業に掛かるんだろ？」

「そうしてくれると助かるよ。でも私は牧場の仕事をしなきゃいけないんだよね」

「その間にできることはねえのか？」

「設計図と、作り方の詳細を書いた紙を渡すから、できる範囲でやっててよ。午後には私も参加するから」

「了解だ」

二人の本気さが痛いほどに伝わってきた。

俺は何故痛いと感じるんだ？俺が本気じゃないからか？まさか、場違いだとは思ってないだろうな？

俺は粘り気のあるヨーグルトを、スプーンで何度も上に伸ばしながら、自問自答を繰り返した。

「え・・・っと、まず、リブってやつを作らなきゃいけないようだ」「リブって何だ？」

「翼の断面形状を維持するものらしい」

「オリンが作り方の詳細を見ながら言った」

「どうやって作るんだ？」

「まずは、反りのない平らな板を準備する。そこにガイドレールを平行に貼り付ける。だそうだ」

「ガイドレールってどれだ？」

「俺は沢山の資材と工具を見ながら言った」

「さあな、とにかく見てみようぜ」

俺とオリンは当てもなく彷徨い始めた。そしてすぐに気が付いた。全ての工具と資材に、名前が書いてある紙が張られていることに。

「凧、あつたぞ。ガイドレールって書いてあるぜ」

探し出すのは簡単だった。それ以外にも必要なものがあつたが、全て探し出すのは容易なことだった。

「オリン、昨日この紙は張られていたか？」

「さあ、どうだったかな」

「もしかして美夕は、あれから全部の名前を書いて貼り付けたんじゃないか？」

「かもな」

「・・・だとしたら」

俺は早朝の自分が憎くなった。

「それだけ本気ってことだ。なら、俺たちも本気で臨むのが筋つてもんだろう」

俺は・・・ここに居ていいのだろうか？居る資格があるのだろうか？

忍び寄る不安と葛藤。出口の見えない迷い。俺は・・・。

「凧、始めよう」

「・・・おじ」

オリンは目を閉じ、精神を集中し始めた。徐々に整っていく呼吸。「嵐の前の静けさ」という言葉が頭を過ぎった。「格闘技は精神の鍛錬なんだぜ」と以前オリンが言っていたが、それを今、俺の目の前で証明した。オリンがゆっくりと目を開けると、静けさの中に独特の威圧感を感じた。青い瞳には断固たる決意が宿っている。吸い込まれそうな魅力があったが、俺は気圧された。同じ志を持っていない、俺の心のせいだ。

「よし、やるぞ」

オリンは十分に熱を帯びた熱線カッターを持ち、板をスライスし始めた。

「どうだ？」

「いいんじゃないか？見事なもんだよ」

俺はスライスされた板を手にとって言った。

「いい感じだけど、ちょっと切り口が粗いかな」

美夕が俺の肩から顔を覗かせて言った。突然の声に俺は驚いて、前方に大きく仰け反った。

「危ねえ」

オリンは素早く熱線カッターを退けた。

「美夕、脅かすなよ」

「ごめんごめん」

美夕は手を合わせながら言った。

「脅かすつもりはなかったんだよ」

「集中しすぎて気配に気が付かなかったぜよ。それより、これは失敗か？」

オリンはスライスした板を指差して言った。

「失敗って程じゃないけど、もう少し滑らかな方がいいね」

「・・・そうか」

オリンは残念そうに言った。

「でもこれは熱線のせいね。道具にも気まぐれはあるからね」

「そうなのか？」

「勿論。さ、気にしないで続けよう」

「道具にも気まぐれはある」かあ。社会に出たら、俺は機械のように、与えられた業務をこなすのだろう。深く考えず、ただ従い、忠実に動く。まるでロボットのようだ。ずっとそう思っていた。けど、道具に気まぐれがあるのなら、俺にだって感情がある。そんな俺を、社会は受け入れてくれるのだろうか？

「凧、こつちを手伝ってくれ」

「・・・今行くよ」

また悪い癖に飲み込まれてしまった。俺は頭を振り、狭い思考の中から、浸かりかけた足を引き戻した。

ここに来てもう1週間が過ぎた。早起きにはすっかり慣れたが「早起きは三文の徳」という言葉が真実なのかは今でも分からない。草原や、崖越しの海、牛やヤギのいる牧場、新鮮だった光景は全て見慣れたものになってしまった。新鮮な気持ちはいつか消え失せる。人間はどんなものにも慣れていくんだろうな。

人力飛行機作りも順調に進んでいる。「空に少しずつ近づいている」その気持ちは、二人のやる気を引き出しているように思える。そんな二人には申し訳ないが、俺はまだ、集中し切れないでいた。俺に全くやる気がないわけじゃない。けど、夢を追っている二人の間にいるのが、辛く、惨めな気持ちになるのは事実だ。

「少し休憩しようか」

「ちよつと、待て、もう少しで、ひと段落、する、から、よつと」

オリンはのこぎりで、木材を短冊状に切り終えた。切った木材を拾い上げると、俺と美夕の所に歩み寄り、腰を下ろした。

「結構重労働だな、美夕がたくましいのはこのせいかな？」

「どういう意味よ」

美夕は怒りながらも笑顔で突っ込んだ。

「まあ、なんだ、気にすんなよ」

先のない話題に自爆したオリンは、紙やすりで手に持っていた木材を擦り始めた。

「この牧場を継ぐのが夢だ」って言ってたけどよ、具体的にはどうすんだ？」

「あ、俺も聞きたいな」

興味があった。どのように夢を見つけたのか、叶えるには何が必

要なのか。

「大学の農学部に通って勉強するよ」

「どこにある大学？」

「この町。この家からだ、通学に大変なんだけど。でも現場で実践しながら学べるわけだから、それくらいは我慢しないかね。大学には推薦で入るつもり。先生は「入学は堅いだろう」って言うだけ、ハッキリするまでは安心できないね」

「どうして農家になりたいって思った？」

俺が一番知りたい部分だ。

「幼い頃からよくここに遊びに来てたんだ。おじいちゃんからチーズの作り方を教わったり、乳絞りを教わったりして、それが面白くてさ、もつと学びたいと思った。それがきっかけかな」

清々しい顔の美夕。本当に好きなんだろうな。この牧場や、自分の選んだ道が。

「私は運がよかったと思うよ。こういう環境を持って生まれたんだから」

羨ましかった。ただただ、羨ましかった。

「オリンは？卒業したらどうすんのよ？」

「まだ決めてないぞ」

きつぱりと、清々しく言い切った。

「どうしてそんなに気持ちよく言えるんだ？焦りはないのか？」

俺は自分でも驚くほど、大きな声でそう言った。

「高校を卒業するまでに将来を決めなきゃいけないって、誰が決めただんだよ？」

「え？」

「美夕みたいに、学びたいことがあるなら進学する。やりたい職があるなら就職する。そうだろう？」

「そうだよ」

「卒業までにやりたいことが見つからないなら、卒業してからも探せばいい。オレは浪人がカッコ悪いとは思わない。」とりあえず「

って気持ちで進学して、親に大金出させたり、適当に選んだ会社に入って、無心で働く方がよっぽどカッコ悪いぜ」

強い意志の宿った言葉が、俺の心に突き刺さった。

「親は？お前の親父さんは？何にも言わないのか？」

「最初は「将来どうするんだ？」って言われたけどよ、今と同じことを言ったら、親父はニヤって笑って何も言わなくなったぜ」

再び、羨ましいという気持ちが湧き上がってきた。俺は人の世界を羨んでばかりだ。そんな自分が、ひどく憎い。

「ちなみに、今のオレの目標は、親父に勝つことだ」

「何それ」

美夕は笑いながら言った。

「オレは親父に一度も勝ったことがねえんだ。一度くらい勝たねえと気が済まねえよ」

「そんなに強いんだ？」

「強いぞ。格闘家としても、人としてもな。ところで美夕、この木材どこに使うんだ？」

「今教えるよ。じゃあ再開しようか」

俺たちは作業を再開した。始めは世間話を交えながら作業していたが、次第に口数は減り、没頭していった。それは虫の声が聞こえるまで続いた。

俺は今まで何をしていた？自分のこと、真剣に考えたのか？

大学や専門のパンフレットに目を通したり、学校に集まる就職情報を読んだりはした。

それは違うだろ？俺はただ見たただけだ。考えたり、悩んだりしたのか？未来を想像したか？

・・・してたさ。

違うね。俺はただ、何に属するかを考えていただけだ。その姿に信念はない。それで自分のことを真剣に考えたと言えるのか？

「うるせえよ」

自分の大声に驚き、俺は布団から飛び起きた。

辺りは真つ暗で、窓の外の虫の声と、破裂しそうな心の鼓動だけが聞こえている。俺の体は、怖い夢から覚めた子供のように震えている。

気持ち悪い汗を拭いながら、隣に寝ているオリンに目を向けた。オリンはタオルケットを跳ね除け、俺に背を向け、腕を組んで眠っている。俺の大声に気付いていないと分かると、心音は少しずつ静けさを取り戻していった。

窓辺に立ち、外を眺める。俺の荒れる気持ちとは反対に、穏やかな風が流れている。綺麗な星空に気が付き、上を見上げる。月に照らされ、銀色に輝く立体的な雲が、風の吹くままに流れている。

「あれに手が届くのかな」

小さく、掠れた声でポツリと呟いた。

俺は本当に空に行きたいのか？

俺の内側から、再び声が響いた。悪夢はまだ覚めていないようだ。行きたいさ。そう思っている。

じゃあ、何で二人と一緒にいて申し訳ないって思うんだよ？どうして劣等感を感じる？

・・・分らない。どうしてだ？

リアルじゃないからさ。俺が空に行きたいと思う気持ちはな、映画のワンシーンを見て「いいなあ」って思う程度のものなのさ。自分の力でやってみたいとは思わない。だから、本気で努力している二人に、後ろめたさを感じる。違うか？

・・・そうかもしれない。

「もう・・・帰ろうかな」



朝霧の中を、静寂を保ちながら歩く。バス停の隣に並んでいる、少し湿ったベンチに腰を下ろし、密かに、静かにバスを待った。

「結構楽しかったなあ」

それももう終わりだ。俺はもう、あいつらとは一緒にいられない。いてはいけないんだ。

「・・・ごめん」

俺は牧場に向かって呟いた。そして、肘を膝の上に乗せ、靴紐を見下ろすように俯いた。後ろから波の音が聞こえる。波の音と共演するように、草原の音が混ざった。もしかしたら、もう二度と、聴くことはないかもしれない音。そう思うと、愛おしさを感じる。俺は目を閉じて、自然の音に耳を傾けた。

誰かがベンチに座る音がした。目を開け、隣の足元を見ると、泥の付いたスニーカーが見えた。

「始発はまだのようだな」

聞き覚えのある声にドキツとした。少しずつ顔を上げると、汗をかいたオリンが腕時計を見ていた。

「駅まで約10キロ、それを40分で走った。悪くないだろ？」

「オリン・・・」

「自己ベスト記録なんだぜ。環境の違いのおかげなのか、目標のおかげなのか、どっちだろうな」

「俺・・・」

「両方かもしれねえな」

「・・・帰ろうと思うんだ」

遠くで車のライトが光った。タイヤが土を踏む音を立て、車は霧を引き裂くように近づいてくる。その車は、スピードを緩めずバス停の前を通り過ぎていった。車の音が遠ざかり、聞こえなくなると、沈黙が訪れた。

「分かってたぜ。夜にそう呟いてたからな」

オリンは、珍しく小さな声で言った。

「起きてたのか」

音量を合わせるように、俺も小さな声で言った。

「あれだけデカイ声出したら、普通起きるだろうが」

「うるせえよ」の一言のことを言っているのだろう。

「生きることがそんなに怖いか？」

「生きること？そこまで大げさに考えてないよ」

「大げさ？将来を決めるってことは「そうなるように生きる」って

ことだろうが。違うかよ？」

「それは・・・そうだけど」

俺は歯切れが悪くなった。

「結局、お前はその程度にしか考えてないってわけだな」

俺は、何も言い返せなかった。たった一つの言葉さえ、浮かんでこなかった。

「中途半端な悩みに食われたか。お前、いつからそんなに弱くなった？」

俺はずっと弱いままだ。今も、今までも。

「俺が思うに、お前は探究心がなさ過ぎるんだ。」テレビで見た。

新聞に載ってた。本にそう書いてあった「お前さ、今まで自分の目でどれだけのものを見てきた？」

俺はオリンの、強い熱意が宿った青い瞳を見た。心の中を、隅まで覗かれるような気持ちに駆られ、目を逸らそうとした。

「目を逸らすな」

声に押され、俺は再び焦点を合わせた。

しばらくすると、オリンは突然、ニツと笑った。そして、俺の右頬を軽く抓った。

「弱くなったのは、オレの思い過ぎのようだな」

「はあ？」

「目え逸らすなよ。仲間から、自分から、親や自分の環境から。もつとよく見る、自分の目でな」

オリンは勢いをつけて、俺の頬から指を離した。抓られた場所にじんわりと温かさが帯び始めた。

「世界は広いぜ、お前が思っているよりもずっとな。世の中には、お前の知らない生き方が沢山ある。それをもっと、見て知るべきじゃないか？」

オリンは俺なんかよりずっと大人だ。信念を持ち、美学を持ち、人を惹きつける魅力を持っている。俺は頬を撫でながら、それを再確認した。

「で？帰る理由は？」

オリンは俺の方に向き直り、ベンチの背もたれに肘を寄せた。

「俺、ここに来てからも、ずっと将来のことで悩んでた。いつも頭の中で、自問自答を繰り返していた。だから、飛行機作りにも集中できなかったんだ。本気のお前らを見てみると、申し訳なくてさ・・・。こんな奴、いない方がいいと思っただ」

俺が話し終えると、オリンは何かを思い出すように、上を向いて髪を撫でた。

「お前さ・・・あれだ。仕事ミスって「責任取ります」って言って辞表を出す社員みたいだな」

スーツを着た俺がそうしている映像が、容易に、鮮明に想像できた。

「それって馬鹿だよな。責任取るなら、キッチリけりつけるのが正しいだろ。辞めるってのは、投げ出すってことだ。それはただの逃げだぜ」

再び遠くから、タイヤが土を踏む音が聞こえてきた。土の中に小石を無理やり押し込む音も聞こえる。いつの間にか、少し霧が晴れていたのによく見えた。バスが来た。

「オレたちは18だ、まだ大人じゃねえ。責任が取れる歳じゃない。

けどよ、ガキでもないんだぜ？自分のことは自分で決めなきゃいけない。だからオレはお前を引き止めない。逃げ出すか、これからを改めるか、お前の好きにしるよ」

バスはゆっくりスピードを落とすと、バス停の前に停まった。プシュッと炭酸の気が抜けるような音と共に、ドアが開いた。

「帰るんだろ？」

「・・・帰るよ、牧場にな」

俺がそう言うと、オリンはニヤニヤしながら俺のバッグを持ち、草原に向かって歩き始めた。俺はオリンの後に続いた。ふと振り返ると、バスは随分と薄くなった霧の中へと、消えて行った。

「風、早く戻ろうぜ、腹減ったよ」

「俺もだよ」

自分の目で見ろ・・・かぁ。

俺は空を見上げた。

もっと近くで、自分の目で空を見てみよう。それができるように、もう少しやってみよう。

家に入ると、朝食を準備し終えた美夕が、不機嫌そうに椅子に座っていた。

「遅い、二人で何処行ってたのよ？」

「散歩してただ、そう怒んなよな」

美夕の視線が、俺のバッグに向けられた。

「へえ〜。バッグ持って散歩？」

「そうさ。いいだろ？ちゃんと帰ってきたんだからよ」

オリンがそう言うと、美夕は声を出さずに笑った。

「お帰り」

美夕は俺を見て言った。

「ただいま」

俺は目を逸らさずに答えた。



壁に打ち付けられた釘に、ラジオがぶら下がっている。ラジオからは、洋楽のオールデイーズが流れている。オリンは「懐かしい」と言っていたが、俺は聞いたことのない曲ばかりだ。オールデイーズとは言うものの、俺にとっては真新しい音楽だ。

結論を言うと、悪くない。古い音源がこの場にはよく似合う。

俺とオリンは飛行機作りに没頭していた。俺たちが今担っている作業は、カッターナイフで木材を削り、プロペラの大まかな形を作ることだ。自分でも信じられない程、無心で挑んでいる。雑念が入ると、乱れた気持ち指先に伝わり、ゆがんだプロペラになってしまう。まるで自分の精神が目に見えるようだ。

「どうだ？曲がってないか？」

「大丈夫じゃねえか？」

オリンはゴーグル付きのヘルメットを被っていた。いつの間にか？何処で見つけたんだ？

「オレのは？どうよ？」

オリンのプロペラは、複雑な曲面を鮮やかに表現していた。「見事だな」

これは器用さよりも、精神力の差だな。

「うっし。磨こうぜ」

俺とオリンはサンドペーパーを手に取り、削ったプロペラを磨き始めた。

「オリン、前から気になってたんだけどさ」

「何だよ？」

俺はプロペラでコックピットを指した。

「この飛行機、3人乗りだよな？」

「そりゃそうだよ」

「美夕は2年前から作り始めたって言うてたよな？」

「ああ、確かな」

「作り始めた頃から、3人で乗るつもりだったのかな？」

「多分そうだよ」

「作り始めた頃から、俺たちを誘うつもりだったのかな？」

「さあな。本人に聞いてみるよ」

「ん・・・」

どうして俺たちだったんだろう？どんな理由が？何故2年経った今、誘われたんだろうか？

また思考の罫に掛かってしまった。しかし、以前ほどの煩わしさはない。むしろあれこれ想像できて、楽しささえ感じる。俺の中で何が変わったんだろう？

「凧、オレたちのボスが来たぜ」

「ボス？鬼軍曹の間違いだろ？」

「凧、今何て言った？」

聞こえてしまったらしい・・・どうしよう。

「いやあ・・・別に」

俺は助けを求めるようにオリンを見た。オリンは俺の眼差しには気が付かず、口元を緩めていた。楽しいのか？困っている俺を見ているのが？

「ま、どうでもいいけどね。それより、午後の作業は中止ね」

「何でだよ？せっかく気分が乗ってきたってのによ」

「実は、もう食料が無くなりそうなんだ。干し肉も野菜も残り少ない。だから、食材を確保しなきゃいけない」

食料の確保。という言葉に、俺は田舎に居るんだ。と、改めて認識した。

「ここでは自給自足が基本なんだろう？任せろ、オレの得意分野だ」

「森に入っちゃ駄目だからね」

「分かってるって。釣竿があつたら？オレは魚を確保するぜよ」  
オリンの奴、また野生化しそうだな。

「じゃあ、お願い」

「餌はあんのか？」

「その辺ほじくればミミズが出てくるから、それ使って」

「餌も自給自足かよ」

「それがこの掟なの」

「俺は？何をすればいい？」

「私は町に行って買い物するから、それを手伝ってよ」

一緒に買い物。俺は少し考えた。

「オリン、お前が町に行けよ。釣りは俺がやるからさ」

「釣りは俺の得意分野だ。分相応なんだよ。お前が町に行け」

俺なりに気を遣ったつもりんだけどな。

「お前がそう言うなら」

まあ、オリンらしいと言えばオリンらしい。あまり気にしないことにしよう。

「逃がさないよ」

美夕は俺の肩を掴んで言った。やっぱり鬼軍曹だ。

バスで町まで行くと思っていたが、甘かった。美夕は何処からか自転車を引っ張り出してきた。

「さ、漕いで」

「・・・町までどれ位だ？」

「さあ？1時間位かな」

二人乗りで1時間・・・結構な運動量だ。

「まいつか。いい運動になるだろうし」

「そうそう。何事も前向きに、ね？」

美夕は俺の両肩をポンと叩いた。

「行くぞ」

俺は力いっぱいペダルを踏みつけた。呆気にとられる程に、自転



車はスムーズに動き出した。

「あれ？」

「どうしたの？」

「いつもより軽いや。・・・痛で」

美夕は俺の横腹を抓った。

「私がオリンより重いと思ったの？」

俺は学校まで自転車で通っている。後ろにオリンを乗せてだ。そのことを、美夕は知っていたようだ。

「そうじゃないって」

学校に着くまでには坂道がある。オリンは坂道に差し掛かっても、意地悪をするように、自転車から降りようとはしなかった。最初の頃は登りきれなかったが、2年生になる頃にはそれが可能になった。継続は力なり。日々の鍛錬の賜物だ。

「へえ、早いじゃない」

「脚力だけなら、オリンにも負けない自信がある」

俺は顎を上げ、少し後ろを向いて、大きな声で言った。横目に映った、髪を押さえている美夕は、学校で見る美夕とは違って見えた。

「おじさん、これ全部で300円にしてくれない？」

ザル一杯に野菜を乗せて美夕が言った。

「嬢ちゃん、そりゃ安いな」

「だって、キュウリは大きくなり過ぎてるし、トマトは普通のより小さいよ。ホウレン草だって夏物だから、栄養価は低いでしょ？」

「手安いなあ」

息を弾ませている俺は、初めて見る値切り交渉に、少し恥ずかしさを感じていた。

「じゃあ、大根2本買うから、400円でどう？」

「分かったよ、好きにしな」

「交渉成立ね。これから、ここ以外で野菜は買わないよ」

「たまには他所に行ってくれよ」

八百屋のおじさんは、文字通りお手上げて言った。

「兄ちゃん、こんなに買ったんだ、ガツガツ食いなよ」

そう言つて、野菜を詰め込んだ紙袋を俺に手渡した。

「あ、はい。どうもすみません」

「ほら、次行くよ」

「・・・おう」

次の犠牲者は誰だ？

「おばさん、豚バラ300gと、鳥の胸肉を200g、それからコロッケ3つサービスして」

「ふう、美夕ちゃんが相手じゃ敵わないね。ちょっと待ってな、今コロッケ揚げるから」

俺はキョロキョロと辺りを見回し、他人のふりをしようと少し離れた。

「ちょっと、何やってんのよ。こっち来なさいよ」

「・・・おう」

やっぱり鬼軍曹だ。

「美夕ちゃんの彼氏かい？」

おばさんは菜箸でコロッケを揚げながら言った。美味しそうな音と匂いが立ち込めてきた。

「そんないい物じゃないですよ」

「大変だね、尻に敷かれてるんだろ？」

「だから違つてば」

おばちゃんは、器用に箸でコロッケを裏返しながら、大きな声で豪快に笑っている。

俺はどう反応すればいいんだろう？

「そうだ、牛筋が余ってるんだよ。持ってきてな」

「いいんですか？」

「そつちのお兄さんの苦勞に免じてね」

再び、気持ちいい位の豪快な声が響き渡った。

「はいお待ち、また二人でおいで。サービスするよ」

「ありがとう」

美夕は紙袋を受け取ると、すぐさま俺に手渡した。おばさんの笑い声が頭の中に響いた。

次はパン屋だ。美夕は自転車から降りると、背負っていたリュックから、数本の牛乳ビンを取り出した。

「おばあちゃん、牛乳持ってきたよ」

「いつも悪いねえ」

「いいつてば、お互い様でしょ？」

おばあさんは牛乳を受け取ると、店の奥に行った。

「ここのおばあちゃんはね、家の牛乳じゃないと駄目なんだ。だから週に一回は届けに来るんだよ」

「へえ、宅配ってやつか」

「まあね」

美夕と話していると、おばあさんが店の奥から戻ってきた。手に3斤ほどの大きさのパンを持っている。

「はい、いつもの全粒粉のパンね」

「全粒粉？」

「玄米パンのこと。私だって栄養バランスを考えてるんだよ？」

「・・・そっか」

食事を作るのも楽しくないようだ。色々考える必要がある。そう思うと、母さんの有難みが身に染みた。

「じゃあね、おばあちゃん。また来るね」

そう言つと、美夕は店の外へ出て行つた。俺は慌てて後を追つた。  
「なあ、お金は？パンの代金は？」

「パンは牛乳と物々交換なの」

「・・・物々交換」

都会では考えられないことだ。土地が変われば、人も習慣も変わるということだ。この町では「ただ通り過ぎるだけの人」は、いないのかもしれないな。

「じゃ、帰ろうか」

「あいよ」

俺は力いっぱいペダルを踏みしめた。

「なあ、聞きたいことがあるんだけどさ」

俺は風を切る音に負けないように、大きな声で言った。

「なあに？」

美夕は、俺の背中に寄り添うようにし、耳元で言った。少し、ドキツとした。

俺はスピードを落とし、束の間の風を作った。

「どうして俺とオリンを誘ったんだ？」

いつもの口調で、いつもの声の大きさを、今朝の疑問を問いかけた。

「高一の時にさ、授業サボって帰ったことあったでしょ？」

「ああ、あったな」

そんなの一度や二度じゃない。どの時を言っているのだろうか？

「オリンと自転車を二人乗りして、颯爽と自転車を漕いでいる姿を、教室から眺めてて思ったんだ。」「あ、この二人なら夢を叶えられるかも」ってね。それで、かな。あの時さ、追い駆けて来る教師をどんどん引き離してたよね。見てて気持ち良かったよ」

「それだけか？」

「ん、まあ。あんたたち、一緒にいて退屈しなさそうだったし、体力持て余してそうだったしね」

「そっか。それで3人乗りに設計したのか。でもさ、どうして1年

の時から誘ってくれなかつたんだ？」

「ん・・・どうしてかなあ…。よく分かんないよ。私だって、自分のこと、全部知ってるわけじゃないしね」

将来設計をしっかり出来ている美夕でも、自分のことを全部知っているわけじゃない。

何だか、また少し軽くなった気がする。

「誰だってそうでしょ？だから、迷うし、悩んだりもする。人間らしいって、そういうことでしょ？」

微かな勇気が、俺の胸の内に生まれた。

「よし、行くぞ。しっかり？まってるよ」

俺はスピードを目一杯上げた。がむしゃらに、ひたすらに、ペダルを漕ぎ続けた。

道路から抜け出し、草原の中を疾走し続ける。あまりの気持ち良さに頭の中が白く染まっていく。後ろから美夕の笑い声が聞こえる。

「俺、ここに残って良かった・・・」

俺が言いかけた時、無重力感が全身を駆け巡り、自転車が宙を舞った。

気が付くと、ぼんやりと空を眺めていた。少し離れた場所で、自転車の車輪がカラカラと音を立てている。段差に気が付かず、飛んでしまったようだ。

体に力が入らず、心臓の鼓動に合わせるように、全身に鳥肌が立っていった。自分の心音が、思わずウツトリするほど心地いい。

「美夕、大丈夫か？怪我してないか？」

俺はハツと我に返り、首だけを起こして辺りを見回した。

すぐ隣に、美夕の姿があった。美夕は仰向けになって、前身を小刻みに震わせている。

「だ、大丈夫。どこも・・・何とも・・・ないよ」

美夕は声が出ないほどの高笑いをしていて、苦しそくに息継ぎをする合間に、そう言った。そんな美夕を見ると、再び脱力感に襲われた。力なく首を草の上に落とし、目を閉じた。

「ねえ。空、飛んだね」

美夕の声に反応して、俺は目を開けた。美夕は足を伸ばして座っていて、片手を草の上につけ、寝そべっている俺を見ていた。

「気持ち良かったねえ」

俺は上半身を起こした。

「ああ、ゾクゾクしたよ。頭の中が全部吹っ飛んだ」

「私の夢、凧が叶えちゃったね」

ドキッとした。もう一度空を飛んだみたいだ。

「こ、こんなもんじゃないだろ？自分たちで作った飛行機で、空に行ったらさ」

俺は美夕から目を逸らし、散らばった野菜を見ながら言った。

「そうだね。きつとそうだね」

風が静かに止んだ。

「おおい。買い物は済んだのかあ？」

遠くでオリンの声が聞こえた。上半身裸のオリンが、バケツと釣竿を持って歩み寄る姿が見えた。

「あいつ、やっぱり野生化したみたいだな」

俺はそう言いながら起き上がった。散らばった食材を拾い上げ、紙袋の中へ戻す。美夕も俺に続いた。

「転んだのかよ？」

「ああ、段差に気が付かなかったんだ」

「大丈夫かよ？」

「問題ない。それより、収穫は？」

オリンは無言でバケツを差し出した。中を覗くと、大きなタコがいた。それと、小さい蟹が沢山詰められていた。

「魚は？釣れなかったのか？」

「駄目だった。フグは釣れたんだけどよ、毒があるから海に帰した」

「もったいない。私フグを調理出来るのに」

「マジか？」

「マジ」

オリンは大きな溜め息をついた。

「でよ、岩場に蟹が沢山いたからよ、手当たり次第に捕まえたんだ。それから、海に潜ったらタコがいた」

「どうやって捕まえたんだ？」

「素手でだ。手強かったぜ、オレに絡み付いてきやがった。だが、オレは奴を陸に引きずり出した」

よく見ると、オリンの体にはタコの吸盤の跡が付いていた。まるで心電図の検査を受けた後のようだ。

「陸はオレのテリトリーだからな。負けるわけがねえ」

「ご愁傷様」俺は心の中で、タコにそう呟いた。

「さすがに疲れた。帰って飯にしようぜ」

「そうね」

俺たちは食料を全て拾い、自転車のかごに詰め込んだ。そして、牧場へと歩き出した。

「頂きます」

手を合わせ、食材に感謝。安くしてくれたおじさんに感謝。コロツケをおまけしてくれたおばさんに感謝。牛乳をパンに交換してくれたおばあさんに感謝。そして、勇敢に挑んだ夕コに冥福を。

「美味い。やっぱ働いた後の飯は違うな」

一口食べたオリンがしみじみと言った。ちなみに、夕食のメニューは、食材を手当たり次第に入れたシチューだ。コロツケはいいが、器から不気味にはみ出ている夕コの足はどうかと思う。

それともう一品。味噌汁だ。オリンが獲ってきたカニを茹で、すり潰し、裏ごしして作った物だ。

「どうした？早く食えよ」

「・・・おう」

シチューを一口食べてみると、見た目とは違い、見事な味をしていた。一日の苦勞が報われていく。

「人はこうやって生きていくんだな」

俺は感慨深く言った。

「急にどうしたの？」

「いや、今まではさ、何もしなくても飯が出てきたからさ。食べることに苦勞を感じたことなんか、一度もなかった。それが母さんのおかげだなんて、考えたこともなかった」

こんな当たり前のことを、俺は18歳になってやっと分かった。

「帰ったら母親孝行しろよ」

オリンは羨ましそうに言った。

「・・・そうするよ」

何をすれば一番の親孝行になる？俺が立派に生きることか？健やかに生きることか？きつと、どちらも欠けてはいけないのだろうな。「こんな美味い飯が毎日食えるならよ、農家になるのもいいよな」「農業はそんな簡単じゃないよ。家畜が病気になるのんだり、作物が病気になることだってある。何かと天候に左右されるしね」

現実はそのなにごくはないってことか。



「私は農業を楽しんでいる。でもね、楽しいとだけ感じるのは、私に責任がないからよ。要するに、まだまだ子供ってこと。農業の全てを知って、それでも楽しいって思えるように、私はなりたい」

同じ18歳でも、俺とは随分違う。俺も見つけなきゃな、俺を熱くさせる何かを。

「もう何年も手伝っているけど、自立して農家をするのは私にはまだ無理」

「そうなのか？」

「そうよ。だから、大学に通って学ぶんでしょ？」

俺は熱弁を振るう美夕に感銘を受けた。全身がゾクゾクしている。凄いや。カッコいいよ。尊敬するよ」

俺は椅子から立ち上がり、頭を過ぎる言葉を全て口に出した。

「お、大げさだっば」

「そんなことない。今のその気持ちは誇るべきだ」

「オレもそう思うぜ」

「は、早く、食べなよ」

美夕はバレバレの照れ隠しで言った。

俺は今まで、美夕の何を見てきたのだろうな。「気が強い人」としか思っていなかった自分が、恥ずかしく思えた。もの見方や考え方を变えるだけで、人の違う一面が見えてくる。そのことにもっと早く気が付けば、学校生活がもっと楽しくなっていたのかもしれない。

「風、醤油取ってきてくれ」

「・・・何にかけるんだよ？」

夜が深け、暑さが退いた。もうすぐ就寝時間なのだが、俺は外に出て、人力飛行機を作っている建物の方へと歩いた。その途中にある、洋風のトラックのドアを開け、中に入った。最近よくここに来

る。何故だか自分でも分からないが、妙に落ち着くからだ。

ギアのレバーに左手を乗せ、右肘をドアの窓辺に乗せる。たったこれだけで、心に静けさが訪れる。

目を閉じて、ここに来てからのことを思い出した。始めてみる風景、いのししを捕まえたオリン。人力飛行機作りに、帰ろうとする俺。オリンの言葉と、美夕の言葉。買い物に行った時のこと、タコを獲ったオリン。

俺は何て面白い人たちと出会えたんだろう。

二人と出逢えた。それだけで、意味のある人生だと思える。もちろん、これだけで終わらせるつもりはない。

車の中に、窓をノックする音が響いた。

「駐禁か？」

そう言った自分が好きだった。心に余裕がなければ言えない言葉だからだ。大して面白くはないけど。

ノックしたのはオリンだった。俺はドアにあるハンドルを回し、窓を開けた。

「お前、何でニヤニヤしてんだよ？」

「お前のせいだよ」

「あつそ。・・・ほれ」

オリンはステンレスでできたカップを差し出した。中にはコーヒーが入っている。

「お、気が利くな。隣に乗るか？」

「やめとくよ」

オリンは俺のカップに、自分のカップを軽く合わせた。

「そこよりも、こっちの方がいい」

オリンはそう言っと、わらが敷き詰められている荷台に飛び乗った。

「ここなら星がよく見える」

わらが擦れる音を立てた。車が少し揺れた。背中にオリンの気配

を感じる。足を伸ばして寄りかかったようだ。

俺はコーヒーに映る星を見た後、カップを口に運んだ。

「・・・苦いな、酸味もある」

「人生の味だ」

「仄かな甘さが欲しいよ」

「それは分かる」

フロントガラスは砂埃を被っていて、ワイパーを動かした跡が、綺麗な曲線となって残っている。俺はガラス越しに、砂埃で濁った星空を眺めた。

「俺はいつも、ガラス越しでものを見ていたんだ」

「ガラス越し？」

後ろからオリンの声が届いた。

「そう。テレビを見ることで、この国の現状を聞いたり、異国の風景を見たりした。それで全てを知った気になっていたんだ。自分の目で、何一つ見たことないくせにさ」

「別に珍しくない。今の時代、そんな奴ばかりだ」

「本物の草原を自分の目で見た時、こんなに感動するとは思わなかったよ」

草原だけじゃない。牛やヤギを見たのも初めてだ。買い物しながら、お店の人と話をしたのも初めてだ。勿論、人力飛行機を作るのも初めての経験だ。

「俺はいつの間にか、生きることに関心を感じなくなっていたんだ。だから、未来が見えなかった」

「成長したじゃねえか。それで、どうするんだ？」

「まだ分からない。けど、もっと自分の目で、色んなものを見たい。もっと、色んな人と話をしてみたい。今はそう思っている」

車が揺れた。そして、土を踏む音が聞こえた。

荷台から飛び降りたオリンは、運転席の窓に、腕を組んで両肘を乗せた。

「お前のことだ、「もつと早くそう思っていれば」って考えているんじゃないか？」

俺は無言で頭を掻いた。

「遅すぎることなんて何も無いぜ。やるか、やらないかだ」

オリンはそう言うと、コーヒーを一気に喉へ流し込んだ。

「人を羨んではかりいるのは、もうやめた。俺も行動するよ。お前みたいに、家族と向き合う。美夕みたいに、やりたいこと見つけるよ」

「それでいいさ。遅す」

「遅すぎることなんて何もない。だろ？」

オリンは笑って両手を小さく掲げた。

「なあ、美夕の奴、もしかして飛行機作っているんじゃないか？」

オリンの目線を追うと、いつも作業している建物から、明かりが漏れているのが付いた。

「そうかもな、もう寝る時間なのに」

「ちよつと見てくる」

そう言うと、オリンは俺にカップを差し出した。

「お前が洗えよ」

俺がカップを受け取ると、オリンはポケットに手を突っ込み、建物へ向かって歩き出した。

「・・・ありがとな」

俺は、次第に小さくなっていくオリンの背中に向かってそう言った。

俺は残っていたコーヒーを流し込んだ。冷めたコーヒーは、すんなりと喉を通っていった。

「卒業したら、旅に出てみようかな」

ふと、そんなことを考えた。

多くの人と出会い、学ぶ。それが俺にとって、大きな財産になるの

ではないだろうか？この広い世界を、俺はどこまで自分の足で歩くことができるのだろうか？

「・・・窓越しは卒業だな」

俺は窓を閉め、車から降りた。濁りのない空に向かって背伸びをすると、微かな勇気が生まれた。

「遅いな、オリンの奴」

建物からはまだ光が漏れている。オリンのことだ、ミイラ取りがミイラになった可能性は十二分にありえる。

「俺も手伝うかな」

俺は建物に向かって歩き出した。

もしかすると・・・二人がいい感じになっているのかもしれない。もしそうなら、俺が邪魔するわけにはいかない。

そう考えた俺は、少し開いている扉に忍び足で近寄り、眩しい光に目を細め、耳を扉に近づけた。

「私・・・どうしたらいいのか分からない」

「何が？」

微かに二人の声が聞こえた。虫の声がうるさくてよく聞こえない。俺は耳をドアに押し付けた。

「私ね、風のこと、好きになっちゃったみたい。・・・どうしよう」

「どうしよう・・・って、言われてもよ」

「・・・どうしよう」。

少しではあるけど、俺にも未来が見え始めた。それは「自分を熱くさせるものを探す」という単純なことだった。正直「もっと早くそうしていれば」とか「出遅れた」とか思ってしまう。けどそんなことを考えている暇があるなら、もっと前に進むべきだ。後ろを振り返っても若返るわけじゃないんだし。

って、もう何度も同じことを考えている。思考がここまで辿り着くと、この前の夜に立ち聞きしたことを思い出す。

「私ね、凧のこと、好きになっちゃったみたい。．．．どうしよう」初めて聞いた美夕の声色。思い出すだけでドキドキしてくる。

俺が美夕に何をした？オリンは美夕が好きで、美夕は俺が好き。じゃあ俺は誰が好き？いや．．．そういうことじゃなくて。

俺は美夕のことをどう思っている？好きか嫌いかで言ったら、好きだよな。でもそれは、友達として？それとも異性として？．．．どっちだよ？

オリンは美夕のことが好きなんだぞ。俺が好きになるわけにはいかないだろ。でも、美夕は俺のことが．．．。

だめだ、仕切り直そう。少しではあるけど、俺にも未来が見え始め．．．。

「．．．い、凧」

それは、自分を熱くさせるものを．．．。

「おい、凧。聞こえてないのか？」

「．．．何だよ、うるさいな」

「何だよじゃねえよ。お前の番だぞ」

ハッと現実に戻ると、呆れた顔したオリンと、心配そうな顔をしている美夕がいた。

そつだ、俺たちは今、飛行機を作つていたんだ。

「俺の番？何をするんだけ？」

「おいしつかりしてくれ、頼むぜよ」

「そつだ、しつかりしろ」そう自分に言い聞かせた。

「今、プロペラの回転数を合わせてるの。それぞれ脚力が違つてしょ？統一しないと真つ直ぐに飛ばないからね」

そつだ、そつだつた。飛行機は一人一つのプロペラを動かす構造になつてゐる。それぞれの脚力を測つて、プロペラの回転数を決めるんだつた。

「大丈夫かよ？さつきから何度も髪を搔き回したり、頭を振り回したりしてたぞ？」

「大丈夫、心配するなよ」

「しつかりしてよ、頼りにしてるんだから」

美夕から優しさを感じるのは、俺の気のせいだろうか？

「じゃ、ペダルを漕いで」

「うす」

俺はまだ骨組みのコックピットに乗り込み、ペダルを漕いだ。左翼に取り付けてあるプロペラが、少しずつ動き始めた。

「力まないでね。自然に、いつも通り自転車を漕ぐようにしてよ」

「ああ、分かつてる」

俺はペダルを漕ぎ続けた。

さて、どうしようか？こつうの場合、自分の気持ちに、素直に従ふべきじゃないか？でも、美夕のことが好きかどうかハッキリ分らない。もし好きだつたとしたら、オリンに顔向けできない。それは絶対に嫌だ。

もしかして、もう手遅れ？だつてオリンは美夕の気持ちを知つてゐるわけだし……。でもオリンは俺に普通に接してくる。いつもと変わらずにだ。隠しているのかな？

オリンは親友だ。一生その関係でいたい。その為には、俺が退け

ばいいのか？でもそうしたら、美夕の気持ちはどうなる？

どっちかしか選べないのか？

「はい、もういいよ」

美夕の声が聞こえた。今度はちゃんと聞こえた。

「もういいのか？」

「うん、もう大丈夫」

俺はコックピットから降りた。

「それじゃ私は計算し直すから、二人で作業しててよ」

オリンと二人で。俺は少し不安になった。こんな気持ちになるなんて、凄く嫌だ。

太陽は沈みかけていて、空は茜色と群青色が混じった色になっている。

「今度は何を考えているんだ？」

明かりをつけていない建物の中に、オリンの音が響いた。

「別に・・・何でもないよ」

俺はそれ以外の言葉が見つからなかった。

「自分でも分からない、ってか？」

オリンは資材を抱え、俺のところへ歩み寄りながら、全てを知っているような口振りで言った。

「ま、世の中には、答えがたいものが沢山あるからな」

オリンは抱えていた資材を床に下ろして言った。オリンは全てにおいて、俺を理解してくれているように思える。そんなオリンに、俺は今まで甘え続けてきた。

「なあオリン。世の中には、どっちかしか選べない時、二者択一の時があるのか？」

「そりゃ・・・」

オリンは空を見ながら腰を下ろした。

「あるだろ。全部は選べない世の中だ」

「もし、お前がそういう場面に遭遇したら、どうする？」



「そうだな・・・」

オリンはじつと俺を見つめた。

「オレは全部を選ぶ」

そう答えると、オリンは小さく笑った。

「さつき「全部は選べない世の中だ」って言ったじゃないか」

「それでも選ぶ。オレは大事なものしか持ってないからな」

俺はオリンに釣られて笑った。

「参考になったかよ？」

「さあ、どうだろうな」

全部を選ぶには、どうすればいいのかな？

俺はその言葉を飲み込んだ。

「もう少して完成だな」

俺は飛行機を見上げながら言った。

「だな。尾翼の調整と、プロペラの取り付け、それから骨組みの部分に資材を取り付ける、それだけだ。そしたらいよいよ空だぜ」

「やっとだな」

・・・そうだ。知らないふりをすればいい。美夕に面と向かって言われたわけじゃない。もし言われたら、その時考えればいい。そうすれば、少なくとも今は何も失わなくて済む。

「二人とも、夕食ができたぞ」

外から美夕の大きな声が聞こえた。

夕食を食べ終えた後、俺は家を抜け出し、車の荷台の上に寝転がって、ぼんやりと星を眺めていた。

久しぶりだ、何も考えないのは。いや「考えるのを止めたのは」かな？

また考えてる。もういいんだ、これでいいんだ。迷うことなんてない。

「あと少しで、夏休みも終わりだな」

俺は空に向かってポツリと呟いた。

「そうだな」

想定外の声に驚き、俺は飛び起きた。

「そんなに驚かなくてもいいだろ。それとも、何か疚しいことでもあるのかよ？」

オリンはそう言って、荷台に寄りかかった。

「そんなことない、ただ、驚いただけだ」

俺は胸の内を知られないように、ゆっくり喋った。

「そりゃ悪かったな」

「別に謝らなくてもいいだろ」

俺はオリンに背を向けた。

考えることを止めたら、俺はずっとオリンに対して後ろめたい気持ちでいなきゃいけないのか？俺はそれを望むのか？

「夕食の時のお前さ、変だったぜ？」

「・・・何が？」

俺は背を向けたまま聞いた。目を逸らすな、という激が飛んできそうな気がした。

「夕食の時のお前は、何も喋らないし、無感情な感じだった。萎んで縮まった風船みたいだったぜ。今もそうだ」

「・・・破裂しそうなほどに、膨らんでいるよりはいいんじゃないか？」

俺はまだ、オリンに背を向けている。

「・・・らしくねえよ」

「・・・」

嫌な予感がする。俺の心音がそう言っている。気持ち悪い空気が、べつとりと体に纏わり付いてくるようだ。

「お前・・・聞いてたろ？あの日、オレと美夕の会話をよ」

「知らない、聞いてない」そう叫ぼうとしたが、体は動かなかっ

た。

「何か言えよ」

何でもいい、叫べよ。震えてないで、何か叫べよ。

「・・・そうなんだな？」

潰されそうだな。これ以上、耐えられない。

「ああ・・・聞いてたよ」

俺は、どちらかを失くしてしまうのだろうか？

「やっぱりな。黙ってれば、何も失わないでいられると思ってたんだろ？」

「・・・うん」

それとも、両方を失くしてしまうのだろうか？

「風、荷台から降りるよ」

俺は何も考えられず、ただ言われたとおり、荷台から降りた。

「風、こっち向けよ」

俺は言われたとおりに、ゆっくりと視線を上げた。

気が付くと、俺は地面に這い蹲っていた。口の奥から生臭い匂いが漂ってくる。痺れた舌で口の中を舐め回すと、気味の悪い味が広がった。

オリンに何をされたのか理解できると、頬に痛みを感じた。

カツとなった俺は、勢い良く起き上がった。

「・・・ってえな。いきなり何すんだよ」

俺は殴られた跡を手の甲で拭いながら、激しく言い放った。

「何で殴られたか分かるかよ？先に言っとくが、嫉妬心じゃないぜ」  
俺は荒れる呼吸を整えようと必死で、何も考えられなかった。

「お前はオレの気持ちを知っている。お前は美夕の気持ちも知っている。それなのに、お前は答えを出そうとしなかった。簡単に出せる答えじゃない、それは分かる。けどよ、考えるのを止めるっての

は、ずるいんじゃないか？」

オリンは、俺が考えることを放棄したことに怒っていた。

「……」

いつの間にか、呼吸は静けさを取り戻していた。

「オリン、お前さ、美夕に何もしなかったのか？好きなら、その気持ちは伝えなかったのか？」

「……伝えなかった。何一つな」

オリンは俺に背を向け、両手を小さく掲げて言った。

それもずるいんじゃないか？俺は腹が立ってきた。

「おいオリン」

オリンはゆっくりと俺の方に振り返った。振り返ったのを確認してから、俺は大きく拳を振りかぶり、全力で振りおろした。

オリンは俺から目を逸らさなかった。

鈍い音が聞こえると、オリンは大きく仰け反った。

「……おい、何で避けないんだよ」

「るせえ、一発は一発だ」

オリンは子供のようになり、口を尖らせて言った。……敵わないな。

俺は殴られた頬を押さえ、しゃがんで車に寄りかかった。オリンは俺の隣で、立ったまま車に寄りかかって、殴られた頬をさすっている。お互い、涼しい風が頬にしみているようだ。

「オレが美夕と二人でいる時、美夕はお前の話ばかりしていた。「風は今何を悩んでいるの？」「風はどうしてこんなに苦しんでいるの？」「風って自分に手を抜かないんだね」「何かしてあげられないかな？」ってな」

全然知らなかった。そんなに気に掛けてくれていたなんて。

「美夕が本気でお前のことを気に掛けるからよ、つい嬉しくなっちゃまってよ」

「……嬉しくなってる？」

「自分の気持ちを伝えるどころじゃなかったんだ」

俺は頬を押さえる手を放した。

「それに、美夕がお前を好きになる気持ちだが、オレには痛いほど分かるんだよ。オレもお前のことが好きだからな」

風が再び頬を撫でた。痛みを感じたが、俺は頬を押さえなかった。

「オリン・・・」

「オレは今でも美夕が好きだ。けどな、美夕が笑っていらればそれで満足なんだ。隣にいるのがオレじゃなくてもな」

・・・ヤバイ、泣きそうだ。

俺は両手で顔を覆った。

「美夕のことだ、必ず気持ちを伝えようとするはずだ。それまでに、お前は自分の気持ちを見つけるよ。どんな答えを選んでも、それが本音の答えなら、お前は何も失わない。分かるよな？」

「ああ・・・分かるよ」

俺は手で顔を覆ったまま、潰れて掠れた声で答えた。

「お前さ、大人だよな」

前からずっとそう思っていたが、ここに来てから、更に強く思うようになった。

「そうかあ？親父に比べれば全然だぜ」

「そりゃそうかもしれないけどさ、それでもお前は凄いよ」

「・・・」

オリンは無言で、草原に手を付けて腕立て伏せを始めた。

「お前にさ、親父と、お袋のこと、話して、なかったよな」

オリンは腕立て伏せをしたまま話し出した。

「ああ、少しだけしか聞いてないな」

オリンは腕立て伏せのスピードを落とし、静かに話し始めた。

「オレのお袋は、オペラ歌手だったんだぜ。その世界では、名のあがる歌手だったらしいぜ。ある日、親父は迷子になっているお袋と出

逢った。親父は中卒だから、英語が全く話せなかったそう。片言の言葉と、身振り手振りで、コンサート会場に行こうとしているのが分かった親父は、お袋を会場まで送ったそう。

「それが全ての始まり？」

「そうだ」

オリンは腕立ての姿勢から、ゆっくりと倒立した。

「親父は、お袋と話がしたいと願った。その為だけに、英語を覚え、何も持たず、その身一つでお袋に会いに、異国へ行った」

オリンは片手を地面から放し、片手で倒立をした。

「その時、親父は18だったそう。オレには、親父と同じことが出来る自信も覚悟もない。お前はオレが凄いなと思っていろいろだよ、お前と何も変わらない、同じ18だ」

オリンは勢いをつけて手を放し、地に足をつけた。

「それでもお前は、俺の前にいるよ」

「いるって言うても、拳の届く範囲だ。手を伸ばせば届くぜ」

オリンはしゃがんでいる俺に、手を差し伸べた。俺はオリンの手を取った。すると、勢い良く引き寄せられ、俺の肩に手を回した。

「これで対等だ」

俺も、オリンの肩に手を回した。

「戻ろうぜ、美夕が心配する」

「・・・そうだな」

俺たちは肩を組んだまま、家へと戻った。

家の前に行くと、ポーチの手摺りに両肘を乗せている美夕が見えた。

「こゝらゝ何処で何やってたあ」

美夕は俺たちに気が付くと、必要以上に大きな声で言った。

「カンカンに怒ってるぜ」

「怒ってるな」

動揺した俺たちは、肩を組んだまま、酔っ払いのように右往左往

しながらポーチに近づいた。

「あれ？怪我してるじゃない。ほら、あざができてるよ」  
美夕は頬を摩りながら言った。

「何があつたの？」

「オリンとケンカした。そんでもって仲直りした」

「はぁ・・・あつそ」

呆れるあまり、怒る気は失せたようだ。

「まったく、心配させないでよ。ほら、早く入んなさい」

ラジオからは、相変わらず聴いたことのない音楽が流れている。世界は広いということだ。俺はその世界の、ほんの片隅しか知らない。但し「今の俺は」だ。

「俺は学校で、今の社会の現実を教えるべきだと思うな」

「例えばどんなの？」

人力飛行機の完成は目と鼻の先だ。俺たち3人は、口を動かしているが、手も動かしている。何とも楽しい時間だ。そう、心から思える。

「例えば・・・そうだなあ」

「即答しろ即答」

「うるさい、気が散るだろ」

オリンはゴーグル付きのヘルメットを被り、尾翼の、ワイヤーの長さの調整をしている。

「例えば・・・刑務所に体験入所するってのは？一ヶ月位さ」

「何の為に？」

「罪を犯した代償を知るためさ。「こんな所にはもう入りたくない」そう思ってたさ、一線を越えずに、踏み止まる奴も出てくるかもしれないだろ？」

「それって教育？」

「教育さ。教科書には載っていないけどな」

「面白いな。お前が言ったように、そういう現実を知っていれば、踏み止まるうとする奴もいるかもしれねえな」

「だろ？」

これは意見と言うより、愚痴に近いのかもしれない。それでも、俺の思ったことだ。俺の考えだ。



「あとはさ、警察とか消防士とか、営業の人とか、現役で、現場で活躍している人に来てもらって、講義をしてもらうってのはどうかな？」

「あ、それは面白いかもね」

「生徒は興味のある講義を選んで、話を聞く。いいところも、悪いところも知る機会を与えるわけだ。現場を知らない教師が、ああだこうだ言うよりは為になると思うな」

我ながらいいアイデアだと思う。

「凧、プロペラを支えて。取り付けるから」

俺は美夕に言われたとおり、背伸びをして、両手でプロペラを支えた。すかさず美夕は取り付けに掛かった。

「理想が崩れて、失望する奴が沢山出てくるかもしれないぜ？」

「その世界に飛び込んでから失望するよりはいいんじゃないか？講義を受けて、別の道を探す奴もいるかもしれないし、逆にやりがいを感じる奴もいるかもしれない。そんな現実を変えてやろうと、使命感を持つ奴もいるかもしれない」

足がプルプルしてきた。限界が近い。

「つつし。凧、もういいよ」

「・・・ふう」

俺は手を放し、屈伸を始めた。何とも言えない感覚が両足を駆け巡った。

「ほら、次行くよ」

「・・・ああ」

「ほら、行くぞ」と自分の足に命令した。

「確かに、何も知らないまま社会に放り出されるよりはいいかもしれないねえな」

「でもさ、そんなことしなくても自分の生きたい道を見つけて、自分の主義や美学に従って進める人もいるよ？」

「それができない奴だって沢山いるぜ？」

美夕とオリンが言い合っていると、俺の脚がプルプルしてきた。

「美夕、手を止めないで早く取り付けてくれよ」

「あ、ごめん」

美夕は急いで取り付けに掛かった。慣れた手付きで工具を操り、瞬間に取り付けを終えた。

「風、次で最後ね」

「ああ、早いとこやっつてしまおう」

俺と美夕は最後のプロペラの取り付けに掛かった。

「美夕、尾翼の調整はどうだ？」

「動かしてみて」

オリンはコックピットの中で、後ろを向いて尾翼を動かした。

「どうよ？」

「うん、悪くないよ。けど、もう少しワイヤーを短くしてよ」

「あいよつと」

オリンは粹な返事をする、コックピットの下に潜り込み、作業を再開した。

尾翼の調整が終わったら、全てが完了したことになる。この時間も後わずかで終わってしまう。そう考えると、どうしても寂しさを感じてしまう。

「なあ、さっきの「できる奴もいるし、できない奴もいる」って話だけどさ」

「何だよ？」

コックピットの中からオリンの声が響いた。

「誰もが自分の将来を真剣に考えるようにすればいいんじゃないか？その為には、オリンが俺に言ったように、探究心を持って生きるようにすればいいと思うんだ。そんな生き方ができるようにしていくのが、本当の教育なんじゃないか？親とか教師とか関係なくさ」

まるで「俺はそうしてほしかった」と言わんばかりの意見だ。言い訳や苦情に聞こえてしまうかもしれないけれど、俺がここに来て感じたことの一つに変わらない。

「うん、そうかもしれないね。保護者は教師に平等や公平を望む。教師は保護者にしっかりとした管理を望む。けどさ、風が言ったように、もっと根本的なことから見直す必要があるかもね。オリンはどう思う?」

オリンは片手をコックピットの中から出し、親指を立てた。

「・・・ださ」

大人からすれば、子供じみた意見なのかもしれない。けど、18歳の世界がここにある。それが何より嬉しかった。

「風さ、何か変わったよね。ここに来てから目まぐるしい勢いでさ」「環境の違いのおかげなのか、目標のおかげなのか。・・・どっちもかもしれないな」

俺はオリンの言葉を借りて言った。

「目標?」

「人を羨んでばかりいないで、自分らしく生きること。・・・かな」  
そう答えると、美夕は満面の笑みを浮かべた。

「・・・いい男になったね」

不意打ちのようなタイミングに、ドキッとした。

「美夕、これでどうよ?」

「あ、えつと、動かしてみて」

動揺したのは俺だけじゃないようだ。

「うん、完璧」

「おおおっしや」

オリンは雄叫びを上げながらコックピットから飛び出した。

「美夕、明日飛ばすんだろ?な?」

「勿論、そのつもり」

「よおし、それじゃ食料を積み込もうぜ」

オリンは野生化しかけているようだ。

「食料?そんなのいらないうてば」

「何でだよ、遙か遠くまで飛んでしまっただろうすんだよ?」

「ちゃんと方向転換できるように作ってあるんだってば。それに、

これ以上重くするわけにはいかないの」

「減量しろ減量」

「私の何処を減らせてのよ？」

美夕は見事な腰の括れに手を当てた。

ドキドキしてしまった。

「オリン、方向転換できるなら食料は必要ないって」

「分かってるって。でもラジオは持つてくからな」

「それ位なら構わないよ」

俺たちは作り上げた飛行機を、いつまでも見上げていた。

「これ、俺たちが作ったんだよな？」

今までに感じたことのない充実感が、実感を通り越している。

「そうだ。オレたちが作ったんだ」

「もう、私だけの夢じゃなくなつたね。これはみんなの夢。私たちが3人の夢」

同じ夢・・・かあ。

何一つやり遂げたことのない俺が、同じ夢を持ち、叶えることができるなんて、ここに来た頃は思ってもみなかった。けど今は違う。

辛く苦しい中にも愉悦があるのなら、俺は今すぐにでも飛び込みたい。そう思えるのは、そう思わせてくれたのは、ここに一緒にいる仲間のおかげだ。

心から、感謝しているよ。

「さ、お祝いにご馳走作らないとね。二人とも手伝つてよ」

「オレの作ったチーズを食おうぜ」

「お前の作ったのはしょっぱいんだよな」

「お前のは甘すぎるんだよ」

「・・・混ぜれば？」

豪華な食事を終えた後、俺たちは早めに床に着いた。「早く寝れ

ば、その分早く明日が来るよ」と美夕が子供じみたことを言ったからだ。

大人しく美夕に従ったものの、逸る気持ちと興奮で目が冴えて眠れない。オリンは何度も寝返りを打っている。長い夜になりそうだ。

どれだけ時間が過ぎても、眠気は訪れない。俺は窓を開けようと思ひ、静かに起き上がった。カーテンを開け、月の明かりに目を細める。こんなに明るいとは思わなかった。カラカラと音を立てて窓を開けると、騒がしい虫の声が部屋に響いた。

「余計眠れなくなりそうだな」

俺は虫よりも小さな声で呟いた。

「蚊が入るだろ、閉めろよ」

「そうだな」

オリンも眠れないようだ。俺は音を立てずに、静かに窓を閉めた。

「眠れないのか？」

「眠れるわけないだろ。明日は偉業を達成する日なんだぜ？」

「そうだよな」

空を見上げると、数え切れないほどの光が灯っている。「明日は、今見上げている空に行くんだ」そう考えると、緊張とワクワクが混じり合った不思議な気持ちに包まれた。

「月まで飛んじやつたりして」

期待も混じっているようだ。

「今日のお前の話だけだよ」

ボーっと空を見上げている俺に、オリンが話しかけてきた。

「教育の話か？」

「そう。なかなか面白い考えだったぜ」

オリンにそう言われるのが、何より嬉しい。

「けどな、お前がそう思ったところで、社会は変わらないぜ」

「・・・そうだろうな」

「だからオレたちが変わらなきゃいけない」

「社会に順応するってことか？」

「そういうことだな」

「社会の言いなりになれ」オリンはそう言いたいのではない。何故かそう思えた。

「順応しながらも、何かを変えていく。そう言いたいんだろ？」

オリンは窓越しの、薄い月明かりの中で小さく笑った。

「そうだ。環境が悪い、仕組みが悪い、大人が悪い。そんな風に一方向的に殴りつけるだけじゃ駄目だ。変えようとする行動が必要だ」

「行動か・・・」

「例えば、お前が教師になって、今日言ったことを実現させる。とかな」

文句を言うだけじゃいけない。不満や考えがあるのなら、その道に入って行動を起こす。ということだな。

「文句を言うだけなら誰にでも出来るしな」

「そういうことだ、話が分かるじゃねえか。もしお前が教師になったらしたら、教科書に載っていないことを教えられそうだな」

「教師か・・・考えたこともないな」

「時間はあるだろ？」

「そうだな」

時間がない。どうして俺は、今までそう思っていたのだろうな。

「オリン、やっぱりお前は俺の前にいるよ」

「またそれかよ、もう飽きたぜ。言っとくけどな、お前が考えるから、オレも考えるんだ。お前が考えなかったら、オレは何も考えなかったかもしれない」

オリン・・・ずっと、一緒に悩んでくれていたんだな。

「・・・あ」

「何も言うなよ」

オリンは俺の言葉を遮った。

俺は両手を小さく掲げた。

「もう寝よう」

「眠れるもんならな」

長い夜は、まだ始まったばかりだった。

空を訪れるのは、午後2時になってからと決まった。もし墜落しても、漂流することなく無事に帰って来られるようにと、潮の流れを計算した結果だ。

午前中、俺とオリンは牧場の仕事を手伝った。作業中は、期待、不安、愉悦、夢への憧れなど、それぞれの様々な感情が入り混じり、口数が少なかった。そのせいか、牧場の仕事は思いのほか早く終わった。

時間は午前の11時。俺は落ち着かない気持ちに平穏を与えようと思い、ポーチに赴いた。

手摺りに両肘を寄せ、これから訪れる空を眺める。相変わらず濁りのない空だ。薄い雲が綿毛のように漂っているだけで、雨の降る様子は全くない。風も、海も穏やかだ。後ろから、ドアを開ける音が聞こえた。

「緊張してるの？」

後ろを振り向くと、美夕が玄関のドアから顔を覗かせていた。

「まあね。この場合、しない方が無理じゃないか？」

「そうかもね」

美夕はドアを閉め、コツコツと音を立てながら俺の隣へ移動した。

「オリンは？」

「仮眠するってさ。眠れなかったみたい」

「俺もだよ」

「実は、私も」

穏やかな風が止んだ。俺と美夕の言葉も止んだ。

言葉を捜しているわけでも、待っているわけでもない。ただ目を



細め、静かに二人の時間を過ごしている。  
心地いい時間だ。

「ねえ、さつき「緊張してる」って言ったけど、それは本気だから？」

美夕は手摺りの上で、組んだ両腕に頬を寄せ、隣にいる俺を、少し見上げて言った。

「・・・そうだな」

平穏を与えられた心は、素直にそう答えた。

「本音を言うとき、ここに来た頃はそんなに本気じゃなかったんだ」俺は躊躇も濁りもなく言った。

「どうして本気になったの？」

まるで子供を問いただすような口調だ。

俺は空を見上げた。

「・・・どうしてだろうな。なった時は鮮明に覚えていたのに、今は言葉にできないよ」

いいかげんでも素直に答えた。それを聞いた美夕は、クスクスと笑った。

「よく分からないのは、その気持ちだが、当たり前になったからじゃない？」

美夕は俺の視線を待っている。・・・ような気がする。

「そうだな。そうだといいな」

俺は答えながら、横目で盗み見るように美夕を見た。俺の微かな視線は、しっかりと美夕に捕らわれた。

「どうして、空に、行こうと思ったんだ？」

俺はドキドキを隠しながら言った。

「よく覚えてないよ、小さい頃の話だから。翼が欲しいと思ったのかもしれない」

美夕は空を見つめながら言った。俺も釣られ、空を見上げた。

「空を飛ぶ。それは夢物語なんだって、年を重ねる度に強く思うようになって、次第にすれていったのはよく覚えてるよ」

「分かるよ、気持ちがすれていくことがどんなことか。現実に苛まれないながら、ズルズル引きずり続ける」

「そうなんだよね」

生きていれば、誰にでも、そういうものがあるのかもしれない。

「でもね、中学になってからかな？グルグル回る洗濯機を見て思っただ。世界で初めて洗濯機を作った人は、手で洗うのが面倒で、洗濯機を作ろうって考えたんだ」って」

美夕の言いたいことが、何となく分かりそうで分からない。

「・・・それで？」

「思いや想いを形にすることが出来るのが、人の力。「それなら私にも出来るかもしれない。夢は夢って言ってないで、実現させてみよう」そう考えられるようになった」

「それで人力飛行機か」

「そういうこと」

美夕は空に届きそうな位、高く手を伸ばして思いつきり背伸びをした。

「さて、そろそろ昼食を作るかな。食べたら行くよ、憧れの空へ」

「じゃあ俺はオリンを蹴とばしてくるとしよう」

「頼んだよ」

何がきっかけで人生が変わるかなんて、誰にも分からない。仲間だったり、洗濯機だったり、色々だ。

大事なものは「ものの見方と考え方」なのかもしれない。

いよいよ、その時が来た。

俺たちは作った飛行機を運び出した。

高原を登る途中、俺は後ろを振り返った。なだらかな降り坂が広が

ついで、その先には柵のない崖があり、その向こうには海と空と水平線が広がっている。

十分な高さまで登り、飛行機の車輪を固定した後、空に風が訪れるのを待った。

「そういえばよ、この飛行機の名前、決めてなかったよな？」

腕を組んだオリンが、思い出したように言った。

「名前なら考えてあるよ」

美夕は風になびく髪を押さえながら、自信ありげな顔をしている。「どんな名だ？」

美夕は胸を張り、

「ウインドベル」

と言った。

「風鈴か、悪くないな」

風鈴は確か「ウインドチャーム」だった気がするけどな。けど、

「じっくりくる名前だよな」

ベルの方が、響きがいい。

俺はいつの間に、理屈以外で物事を判断できるようになったんだろ  
うな。

「ま、いつからでもいいか」

「何がだ？」

「何でもないよ」

風に遊ばれていた美夕の髪が、静かに止まった。

「よし、行こう」

手櫛で髪を整える美夕が、意気揚々とコックピットの先頭に乗り込んだ。

「今がその時」

俺は美夕に続いて乗り込んだ。

「準備はいいな？」

オリンは車輪を支えている木材を勢い良く蹴り飛ばした。そしてすかさず乗り込んだ。

ジェットコースターのように、飛行機が少しずつ降り始めた。俺の意思に反し、体が硬直し始めた。

「漕げ、風」

すぐ後ろからオリンの激が聞こえた。ハツとしながらも、俺はペダルを漕ぎ始めた。

「オリン、力みすぎ。少し力を抜いて、プロペラの回転数を合わせ  
て」

「了解だ」

徐々にスピードが上がってきた。体が強張ってくる。思考回路が混乱し始めた。

「こ、これ、本当に、飛ぶのか？」

もし垂直に落下したら・・・。

「誰が作ったと思ってんの？心配ないよ」

風切り音に混じって美夕の音が聞こえ、胸に響いた。体の硬直は解けなかったが、思考回路は正常に戻った。

徐々に崖が近づいてくる。

「閉じるな。目を閉じるな。見開け、そして、見る」

そう、自分にそう言い聞かせるように呟いた。

「行こう、空へ」

凄い勢いで吊り上げられるような感覚。一瞬の無重力感。全身が逆立っているような気さえする。頭の中が真っ白に染まり、フワフワと浮いている。

白く染まった頭の中が、徐々に青色に染まり始めた。

「・・・飛んでる、飛んでるよ。俺たち、空にいるよ」

「風、しっかり漕げ。傾いてきたぜ」

俺は思い出したようにペダルを漕いだ。飛行機が水平を取り戻す

のに、それほど時間は掛からなかった。

後ろをチラリと見ると、俺たちが過ごした牧場が小さく映った。

「後ろを見てみるよ、牧場が見えるよ」

俺は二人の声を待った。

「オレたちよ、少し前まであそこにいたんだよな。信じらんねえよな」

怒鳴るような声のオリン。

「あの牧場で、全てが始まったんだよね？」

今にも泣き出しそうな声の美夕。

「私たちは今・・・空にいるんだよね？夢は夢じゃなくなったんだよね？」

「そうさ。俺たちは今、空にいる」

俺の声を合図に、オリンは雄叫びを上げた。美夕も大声で叫び始めた。俺も二人に続いた。穏やかな空に、みんなの歓喜の叫び声が響き続けた。

物凄い高揚感を感じる。何事にも屈しない無敵感も感じる。こんなに心が躍るのは初めてだ。どうかなってしまいそうだ。

「オレはここに誓うぜ。お前ら、よく聞いてくれ」

オリンはそう言うと、大きく息を吸い込んだ。その勢いは、俺の耳まで届くほどだ。

「オレはあ、卒業したらあ、自衛隊に入ってえ、この国を守るぜえ。それからあ、親父に勝あつ。それがあ、オレの選んだ道だあ。悪いかよおおお」

オリンの言葉は、俺の心をビリビリと痺れさせ、体をゾクゾクさせた。

「じゃあ次は、私の番」

美夕は背中を仰け反らせて息を吸い込んだ。

「私はあ、尻のことが大好きい。胸が痛い位、好きで、好きで、たまらない。それが、私の気持ち。悪いかよおおお」

美夕の胸の痛みが、俺に伝わってきた。俺の知っている痛み。同じ痛みだ。

もう分かっているだろ？自分の気持ち。答えなきゃいけない、伝えなきゃいけない。

今が、その時なんだから。

俺は大きく息を吸い込んだ。

「俺は、」

伝えようと身を乗り出したときだ。右翼から大きな音が発せられ、俺の言葉を遮った。音に気を取られ、右翼に視線を向けると、プロペラが外れ、海に向かって落ちていくのが見えた。

そして、機体が傾き始めた。

墜落した飛行機の左翼の上で、俺は裸足で仰向けになって、さつきまでいた空を眺めている。

太陽に手をかざし、右足の膝から下を海に垂らし、時折海水をかき混ぜる。これも、誰にでも出来る経験じゃないだろうな。

オリンは靴を脱ぎ捨て、ずぶ濡れになったシャツを脱いで海水を絞り出している。それが終わると、シャツをバサバサと振り始めた。それに合わせるように、機体が大きく揺れだした。

「岸に着くまでには乾くと思うよ」  
「だろうな」

美夕は右翼の上で、裸足になった足を伸ばし、上半身を支えるように、両手を翼の上に付けて座っている。

「すげえ楽しかったな、空の旅」

オリンはシャツを上下に振りながら言った。

「草原に帰れなかったね」

「ここでこうしているのも悪くないよ。むしろ、いい経験だと思えるよ」

「オレもそう思うぜ。ドラマには必要なシーンだ」

美夕は太陽に向かって背伸びをした。

「確かに・・・気持ちいいよね」

そして、息を吐き出しながら、オレと同じように仰向けになった。

俺は仰向けのまま、さっきの言葉の続きを言うタイミングを捜していた。一度見失ったものを見つけるのは容易じゃない。けど、言わなきゃいけない。美夕もきつと俺の言葉を待っている。

カモメが空を飛んでいる。

弱い波が押し寄せた。

風が吹いた。

風が止んだ。

日が傾き始めた。

太陽に雲が掛かった。

再び、風が吹いた。

「あゝあゝあゝ。見てらんねえな。美夕、岸までどれ位かかる？」

「そうね・・・後2時間位かな？」

「そうか、じゃあオレは泳いで先に岸に戻ってるからな」

「お、おいオリン」

オリンは俺に耳を傾けず、海へと飛び込んだ。

水しぶきの音が止むと、胸の鼓動だけが俺の耳を支配した。

言わなきゃ。伝えなきゃ。

俺は起き上がり、美夕のいる右翼へと移動した。そして、仰向けの美夕の隣に腰を下ろした。

「・・・聞こえる？」

「何が？」

「俺の、胸の鼓動」

「聞こえない」



「あ……そつか」

美夕は上半身を起こした。

「……それだけ？」

何度心の中を弄つても、砂塵のような小さな欠片しか見つからなかった。かき集めれば、一つの言葉が出来上がる。その言葉が何なのか、俺は知っている。分かっている。

「俺さ、美夕のこと、何一つ知らなかった」

心にある、確かな強い気持ち。

「ここに来て、初めて知ったんだ。大空美夕という人を」

俺はそれを失くしていない。

「気が強くて、自分を持っていて、カッコ良くて、女らしさもあって、時折可愛らしさが見え隠れしてる。そんな人だ」  
忘れてもいない。

「いや……こんな回りくどい言い方は止めるよ」

小さな欠片でも、この胸にしつかりと残っている。

大好きな人の名と、その人へ伝える言葉が。

「俺は、美夕が好き。美夕の全てが好き。だからもっと、隣にいたい。もっと近くにいきたい」

これ以上、言葉は必要なかった。互いの瞳が全てを物語っている。  
「なあ……キスしようか」

美夕は静かに頷き、瞳を閉じた。

翼に手を付き、身を乗り出した時だ。

「あ」

「れ？」

飛行機が傾き、俺と美夕は海へ落ちてしまった。

俺たちは海面へ上がり、翼に？まった。

「・・・カツコ悪い」

俺は髪をかき上げた後、ゆっくりと顔を撫で下ろした。

「でもさ、私たちがらしいよね？」

俺と向かい合っている美夕は、翼に頬杖を付き、俺の仕草を眺めながら言った。

「こついう「らしさ」って必要か？」

「必要だつてば。ホツとする瞬間だよ。変わらない良さもあるからね」

美夕に言われると、本当にそう思えてしまうから不思議だ。

「心にも、凧の瞬間が必要ってことか」

「そういうこと。そして、私にその凧をくれるのは、凧だけ」

俺にこのドキドキをくれるのは、美夕だけだ。きつと、これからもずっと。

「ねえ、こつちに来てよ」

「あ、うん」

俺は海に潜り、翼を越え、美夕の隣へ移った。

「ほら、見て見て」

美夕は子供のようににはしゃぎながら、空を指差した。

美夕の指先を目で追うと、言葉を失うほど綺麗な夕日に目を奪われた。

いつの間にか風と波は止んでいて、茜色をした、静寂の、夕凧の世界が広がっていた。

「ねえ・・・さっきの続き・・・しようよ」

目を閉じても、瞼には茜色が滲んでいる。

震える唇を重ね合つと、俺たちにも風が訪れた。

岸に流れ着くまで、夕風と、三人の靴だけが、二人の風を見守り続けた。

海から砂浜へ、ウインドベルを引きずり出していると、遠くからオリンの声が聞こえた。

「よう、もうそつちに行つていいか？」

「ああ、手を貸してくれ」

俺が答えると、オリンは駆け寄ってきた。久しぶりに三人が揃つた。

「何も言わなくていいぜ、見てれば分かる」

そう言つと、持て余していた力を惜しむことなく発揮した。

「牧場まで運ぶんだろ？」

「勿論。修理して改良を加えるからね」

「そしたらまた空に行けるな」

「今度はこの夕日を飛ばうぜ」

「あ、それいいな」

俺たちはまだ濡れている靴を履き、夕日を見送りながら、ウインドベルを押し始めた。

誰も、何も喋らなかつた。全て胸の中で語り続けた。みんなそんな顔をしている。

心地良い沈黙を保ちながら、ウインドベルを牧場の近くの草原まで運んだ。

「なあ、さつき牧場に戻ってカメラ持ってきたんだ。記念に撮つと

「うぜ」

もう夏休みが終わる。それをオリンの言葉で実感した。

「そうだな、いい考えだ」

「ウインドベルも一緒に撮るんでしょ？」

「当たり前だろうが。ほれ、写る準備しろ」

美夕はコックピットに乗り込み、俺は機体に寄りかかった。タイマーをセットしたオリンは、翼を挟んで俺の隣に移動した。

「写真見る度に思い出すんだろうね。ここでのこととか、空のこととかさ」

「写真は思い出の扉絵だからな」

「見る度に「昔は良かった」って言って、甘えるなよな」

シャッターの音がすると、高校最後の夏が幕を下ろした。

18年という長くも短い人生の中で、一番長く感じられた時間だった。

9月。

すっかり早起きの癖が付いた俺は、オリンと一緒に、学校に一番に登校するようになった。誰もいない教室には残暑もなく、どことなく寂しげな雰囲気を感じる。

机の上で頬杖を付き、飛び交う言葉を聞き流している。教室の広さ、人の数、クラスメートの会話、何一つ変わっていない。なのに、どこか小さく見えてしまう。

オリンも美夕も、この夏の出来事を誰にも喋らなかつた。だからと言うわけではないが、俺も誰にも話さなかつた。

俺と美夕は、それなりにうまくいつている。学校から一緒に帰ったり、休日にどこか出かけたりと、何処にでもいる、普通の恋人同士の関係だ。急な展開があるわけでもなく、二人の速さで時間が進んでいる。

オリンとは相変わらずの関係だ。俺と美夕に気を遣うこともなく、野暮なことを聞いてくることもない。

誰が見ても、淡々とした日々だと思う。これも「何も変わらない良さ」の一つなのだろうか。

10月。

淡々と続く日々の中、大きく変わったものがあつた。それは俺自

身だ。

「風、あなたは結局、この夏休みで何が変わったの？」

「食事中、母さんが俺に問いかけてきた。ここまでは何も変わらない。」

「チーズの作り方を覚えたよ。それから、乳搾りも出来るようになった。早寝早起きも出来るようになった」

俺がそう答えると、父さんはテレビを見ながら笑った。

「あのね、私が聞きたいのは、将来のこと。行く前に言ったでしょう？ 将来のことを考えるって」

母さんは悲しそうに怒りながら言った。

少し早い気がするけど、俺は今考えている将来のことを話してみようと思った。これも何かの機会だ。

「俺さ、自分が何になりたいのか、真剣に考えたことなかったんだ。俺は「何になれるのか」それだけを考えていたんだ」

「・・・それで？」

「このままじゃ、実のない人生を送ってしまう結果になると思う」

「・・・それで？」

「俺、もっと知りたいんだ。自分に何が出来て、何が出来るようになるのかをさ」

「・・・それで？」

「それを知るには、この世界のことを知らなければいけないと思うんだよ。どんな場所があつて、どんな仕事があつて、どんな人たちがいてこの世界が成り立っているのかをさ」

「・・・それで？」

「だから、俺はそれを知るために旅に出たい。もっと色々なものを見て感じたいんだよ」

全てを言い終えると、母さんはテーブルに両肘を付け、両手で顔を覆った。

「・・・わざわざ回りくどい真似して、それが正しい人生だって言えるの？ 無駄な時間を過ごすかもしれないのよ？」

予想通りの展開になった。けど、このまま退くつもりはない。

「無駄なものなんてないよ。あつたとしたら、俺が無駄にしているだけだ。俺はもう、何も無駄にしない。それには自信があるんだ」

「平凡な人生を送りたくないだけでしょ？普通に生きることは悪いことじゃないのよ？お父さんもそう思うでしょ？」

母さんは、テレビを見続けている父さんに答えを求めた。

「そうだな、そういう幸せもある」

「ほら、お父さんもそう言ってるでしょ？平穏な人生が、一番の幸せなんだから」

「それは俺が決めることだろ？」

母さんは再び顔を両手で覆った。

「母さんは、俺のことを何も分かってない」

「そう、何も分かってない。」

「だけど」

一方的に殴りつけちゃ駄目だ。

「俺も、母さんのこと、何も分かってなかった」

「この夏に学んだことの一つだ。」

「自分でやってみて分かったんだ。食事を作ったり、洗濯したりすることが、どれだけ大変なのかをさ。親の有難みが、この年になってやっと分かったんだ。今だって、俺のことを真剣に心配して言っているんだって、分かっているつもりだ」

母さんは何も言わず、ただ黙って俺の話を聞いている。いや、聞いてくれている。

「だけど、俺は自分で決めたとおりに生きてみたいんだ。ふざけて言ってるわけでもないし、逃げ出したくて言っているわけでもないんだ。本気でそうしたいと思っっているから言ってるんだ」

本気の言葉を言い放つと、父さんは静かにテレビを消した。

「そこまで言うなら、お前の好きにするといい」

「あなた、またそうやって無責任なことを」

「私はただ、風の好きなように生きて欲しいと思っているだけだ」  
「それは無責任とは違うんですか？」

「風がもし、人様に迷惑を掛けるようなことをしたのなら、私は責任をとるつもりだ」

「そういうことじゃないでしょ？」

母さんと父さんが、こんなに言い合うのを聞くのは初めてだ。

「俺の話を聞いてくれ」

俺は二人の間に飛び込んだ。二人は言い争いを止め、俺に耳を傾けてくれた。

「このまま黙って出て行くことも出来るけど、それは絶対にしないよ。納得してもらつまで、説き続けるつもりだ。それが家族ってものだろう？」

俺の強い意志を示すと、居間は静まり返った。

「ご馳走様」

そう心を込めて言った後、俺は食器を台所に運び、部屋へと戻った。

11月。

早起きをすると、余計に寒さを感じてしまう時期だ。それでも、この夏に培った習慣を守り続けている。

学校からの帰り道、自転車を押しながら美夕と歩いていると、美夕が薄く白い息を吐きながら俺に報告を始めた。

「私ね、大学の推薦に受かったんだ。だから春になったら、またあの牧場に行くんだよ」

嬉しそうにそう言うと、俺の自転車のかごにカバンを押し入れた。

「よかったな、これで一步前進だな。ま、心配してなかったけどな」  
ここまで夢を持っている人だ、推薦に落ちるはずがない。

世界はそんな風に成り立っている。そう願いたい。



「あのさ、凧」

「何だ？」

俺は何を言われるのか、何となく想像できた。

「ね、一緒に行かない？今年の受験は間に合わないかもしれないけどさ、来年受けてもいいし、私が学校で習ったことを教えてもいいし。凧が農業に興味があるならだけど」

もし美夕が、モジモジしながら上目遣いでそう言ったとしたら、思わず頷いてしまったかもしれない。

けど美夕は一気に、ストレートに言ってきた。その方が美夕らしい。逆に美夕の性格が窺えて好きだな。だからこそ、俺も自分の意思を貫き通せる。

「正直、そうすることも真剣に考えたんだ。牧場の手伝いは楽しかったし、やりがいもあった。自分のやったことが、自分に恩恵として返ってくるのは、農業の醍醐味だよな」

目を閉じると、この夏に覚えた、草の音と匂いがしてくるようだった。

「へえ・・・そんな風に思ってくれていたんだ」

美夕は一番嬉しい時の顔をして言った。

「けどさ、もう少し時間をくれないか？もっと自分のことを知りたいた。知った結果、農業を選ぶかもしれないし、違う何かを選ぶかもしれないけどな」

「うん、全然構わないよ」

俺のことをよく理解してくれている。俺はそんな美夕が一番好きだな。

「やだ、離れたくない」と言っつて、腕を掴んで甘えられたら、俺はどうしただろうな。

そんな考えが頭を過ぎった。もしそう言われたのなら、納得してくれるまで説得したんだろうな。

「じゃあ、また明日」

互いにそう言い合い、手を振った。

その日の、夕食を終えた時だ。父さんがテレビを消して、俺に話しかけてきた。

「凧、お前旅に出たいと言っていたが、具体的にどうするつもりなんだ？」

父さんは手を温めるように、お茶の入った湯飲みを握り締めている。

「バイトをして、お金を作って行くつもり。場所はまだ決めてないけどな」

「ん・・・そうか」

「やっぱりそうか」という言い方だった。

「その気持ちに、変わりはないんだな？」

「勿論」

父さんは小さく何度も頷くと、湯飲みをテーブルの端に寄せた。

「凧、これを受け取れ」

そう言うと、厚みのある封筒を俺に差し出した。

「何？」

「100万円入っている」

「はあ？な、ど、何だよ？」

あまりにも突然すぎて、俺は大きく動揺した。

「その金で、行ける所まで行ってこい。色んな景色を見たり、場所を知ったり、様々な人と出逢えば、お前が思うようにいい経験になるだろう」

「お父さん、何てこと言ってますか」

いつもどおりの母さんの反応に、父さんはテーブルを強く叩いた。

「男同士の間には口を挟むな」

強い声が止むと、湯飲みがテーブルを転がる音だけが居間に響い

た。

「母さんは黙って話を聞きなさい」

父さんはタバコに火を付けた。

「私は、何となくという気持ちで大学に入った。特に理由もなく、今の会社に入って、言われたとおり仕事にこなししてきた。この前、風が言ったように、実のない人生と言えるのかもしれない。けどな、決して今が不幸だとは思っていない。母さんが言ったように、平凡な幸せがここにあるからだ」

そこまで言うと、父さんはタバコを吸い、煙を吐き出した。

「でもな、将来のことを真剣に考えているお前を見て、私は思ったんだ。「もつと違う生き方ができたのではないだろうか?」とな」  
再びタバコを吸い、煙を吐き出した。

「そう考えたら、この年でワクワクしてしまったんだ」

父さんは、まだ半分以上残っているタバコを灰皿に押し付け、火を消した。

「けど、今ここにいるのは、45歳の男だ。人生を変えるのは難しい。だからと言うわけではないが、お前には自分の意思で、未来を創造してほしい。何年掛かってもいい、生きたいように生きてくれ。それが出来たら、どんなに苦しくて辛くても、幸福と思える人生になるはずだ」

母さんは下を向いて、じっと父さんの話を聞いている。泣くわけでも、否定するわけでも、賛成するわけでもない。ただじっと、思いを巡らせている。

「お金を渡すのはどうかと思ったが、私が今のお前にしてやれることは、これだけだったんだ」

俺は泣きながら封筒を手を取った。厚く、重い封筒には、父さんの想いが詰まっている。そう考えると、これは受け取るべきなんだろうな。

「大事に使わせてもらうよ。絶対に無駄にしない、約束する」

「そうしてくれ」

「・・・ありがとう、凄く嬉しいよ。俺の気持ちを汲んでくれて」「俺も男だからな」

この時、俺は初めて父さんが「俺」と言ったのを聞いた。涙が滲んだ目を拭い、父さんを見ると、そこには45歳の大人ではなく、青年の顔をした父親がいた。

「母さん、自分の子供が、強い志を持って生きてくれる。これ以上の親孝行はないんじゃないか？」

母さんは何も言わなかった。突然のことだったから、もう少し時間が必要なんだと思う。

12月。

本格的に寒くなったとはいえ、まだ初雪は降っていない。俺はいつもどおり、自転車での登校を続けている。

教室の中は外の空気と同じように、静けさが漂っている。受験を控えた生徒を気遣っているからだろう。

口数の少ない昼休みの教室で、俺はずっと美夕を眺めていた。タイミングを探すためだ。言わなければいけないことがある。自分の、選んだ道についてだ。

「よう、なに探してんだ？」

相変わらず、オリンは勘がいい。

「話すタイミング」

「まだ話してないのかよ？何やってんだよ、ババツと話しゃいいだろうが」

「それが出来るならやってるって」

話しにくい理由があった。その理由は、俺が旅に出る場所だ。

「それより、オレの進路が決まったぜ」

「え？」

オリンは自衛隊の試験を受けられなかった。牧場からこの町に戻

つてきた時には、試験の申し込みが締め切られていたからだ。

「試験は来年受けるとして、それまでの間にやることを探してたんだ」

「それで？」

「警備会社に就職したぜよ」

「へえ、警備員か。似合うな」

「だろ？いずれは退職するわけだから、バイトの身分でいいって言ったんだけどよ、それが逆に気に入られちゃったみたいでな、社員として採用になったんだ」

オリンがガードする場所は、世界一安全な気さえする。オリンをよく知る俺が思うのだから、間違いない。

「ねえ、何話してるの？」

「オリンが警備会社に就職したんだってさ」

「へえ、似合うじゃないの」

美夕も俺と同じように感じたようだ。

「みんなほとんど自分の道に入っていくね」

「そういう時期だからな。な、凧」

「・・・そうだな」

オリンから、サインを感じる。そうだよな、早く言わなきゃいけないよな。

「美夕、今週土曜は暇？」

「土曜って、明日？うん、時間はあるよ」

「じゃあ会おうよ」

「いいけど、何処行くの？」

「考えとくよ。明日、10時に神社の前で待ち合わせな」

「いいよ。オリンもどう？」

「オレはやめとく」

美夕に全てを伝えよう。きっと分かってくれる。

俺と美夕は当てもなく町中を彷徨っていた。どこに行っても、サ  
ンタの格好をした人が目に付く。

「もうすぐクリスマスなんだな」

「何それ。もしかして、忘れてた？」

「まさか、そんなわけないだろ」

俺は頭を下げ「すいません、忘れていました」と、心の中で呟い  
た。

「この店に入ってみよう」

適当な店に入っては、ウィンドウショッピングに勤しむ。それを  
繰り返し、時間を潰していった。

「ところでさ、私に話しがあつたんじゃないの？」

夕暮れ時の帰り道で、美夕は俺の心を見透かしたように言った。

「あ、うん」

話をするのが目的で今日は会ったんだ。勿論、俺はそれを忘れて  
いない。

俺は歩きながら深呼吸をした。

「実は俺さ、旅に出ることにしたんだ」

「やっぱりね、そうすると思った」

美夕は分かっていたのが嬉しいのか、クスクスと笑った。

「私が怒ると思ってたの？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ」

夕日を見上げると、あの夏の思い出が蘇った。あの時と同じよう  
に、俺の胸は高鳴っている。

俺はもう一度深呼吸をした。

「俺、外国に行くつもりなんだ」

「・・・え？」

小さく声を上げ、美夕は立ち止まった。

俺は後ろに振り返った。

「異国を見てみたいんだよ。国が変われば、文化も風習も人も変わる。それをこの身で感じたいんだ」

自分の真っ直ぐな気持ちを美夕に伝えた。

「本気で言ってるの？」

「ああ、本気だ」

少しずつ、美夕の顔が曇り始め、崩れていく。

「しばらく・・・連絡も出来なくなるね」

「そうなるかな」

「・・・どれ位？」

「1年か、2年か、それ以上かもしれない」

美夕の目が、何かを探すように、忙しなく動いている。

「パスポートは？」

「これから作るよ」

「言葉は？」

「今オリンに習ってる。足りない部分は情熱でカバーするよ」

「襲われたらどうするのよ？」

「オリンに護身術も習ってる」

「銃を持つことが許されている国もあるんだよ？死ぬかもしれない

んだよ？」

「大丈夫、何とかなるよ」

「もう二度と会えなくなるかもしれないんだよ？それでも平気なの？」

「平気じゃないよ。けど・・・自分から目を逸らすのも平気じゃない。だから、」

「何よ」

「分かってほしいんだ」

「分かってるよ。分かってるけど、」

美夕は今にも泣き出しそうな顔をして、肩で息をしている。

「しばらく会えないのは我慢できるけど、わざわざ危険なことをす

るなんて・・・あんまりでしょ？」

「ちゃんと生きて帰ってくるよ。約束する」

「いい加減なこと言わないでよ」

美夕は俺を残して走り去っていった。

胸が痛い。告白した時の何倍も痛い。張り裂けそうで、息も出来ない。

「全部は選べない世の中だ」そう、オリンが言ってたっけな。

「俺はこの話をする前に、おみくじを引いたんだ。そしたら大吉だったんだ。それなのにこの結果だ。・・・おい聞いているのか？」

「聞いてるって」

俺の愚痴を聞きながら、オリンはコタツでみかんの皮を剥いている。

「あの神社さ、大吉の量を水増ししてるらしいぜ。二回に一回は大吉が出るそうだ。凶を引いた方が、御利益があるって噂だ」

「だからか、あんな結果になったのは」

「そんなこと言っていると、バチが当たるぜ。それより、お前も神頼みするんだな」

「別に、景気付けだよ」

「だったら文句言っな」

「分かってるって」

俺もみかんを手に取り、皮を剥き始めた。

「しかしよ、美夕もいじらしいよな。お前と会えなくなるよりも、お前の身を案じるなんてよ。お前は幸せ者だぜ？」

「・・・そうなんだよな」

今日はやけに、みかんの汁が目にしみる日だ。

「で、諦めるのか？」

「まさか、もつと話し合うよ」

「その気持ちがあるなら、落ち込んでばっかないで、もつとやる



「ことあるだろ？」

「……………」

俺はみかんを丸ごと口に入れた。

「……………そうだよな」

俺は全部を選びたい。俺だって大事なものしか持ってないのだから。

「今日は湯豆腐なんだ、お前も食ってけよ。食い終わったら言葉教えてやるからよ」

結局、あれから美夕と話せない日が続いた。美夕は学校にいる時わざとらしく、常に誰かと話をしていて「私に話しかけないで」という雰囲気を出している。目すら合わせてくれない。

そうこうしている内に、学校は冬休みとなった。

何度電話してもつながらない。かといって、家の前まで行くのは行き過ぎた行為と思える。結局のところ、完全に手詰まり状態だ。

1月。

何度電話しても、美夕につながることはなかった。新年を迎えたというのに、俺は電話を握り締めて、コタツの中で丸くなっている。こんな新年は寂しすぎる。甘えたい気持ちを抑えるように、俺は更に身を丸くした。

年明けの朝、俺は電話の音で飛び起きた。

「美夕？」

と、思いきや、オリンだった。思わず電話を投げ捨てようと振りかぶってしまった。

「・・・何だよ」

俺は投げやりな声で電話に出た。

「新年早々シケた声出すなよな」

「ああ、悪かったな」

「本心じゃないなら言わなくていい。それより、初詣に行こうぜ」  
「・・・初詣？」

正直、そんな気分ではなかったが、美夕に会えるかもしれないという思いが、俺の足を動かした。

「おみくじ引かないのかよ？」

「どうせ大吉だろ」

「そう悲観すんなよ」

「無理な話だ」

俺たちは今、神様に祈りを捧げる為に並んでいる。牛のようにノロノロと前に進みながらも、人ごみの中から美夕を探し続けている。

「ポケットに手をつ突っ込んで、携帯を握り締めているお前を見てみると、痛々しくなる」

「女々しいか？」

「いや、そうは思わないけどな」

何処にも、美夕はいない。全然似てない人を見ても、思わず声を出しそうになる。

電話も鳴らない。ちゃんと電波があるのか、何度も何度も確かめた。

何処にも、美夕の気配はない。影もない。もしかして、この世界にいないのか？

「おい、順番が回ってきたぞ。ほれ、神に祈りな」

「・・・おう」

ただの妄想だ。

俺は気を取り直して、神に祈ることにした。こんな時にだけ祈られても、神様にはいい迷惑かもしれないが。

「・・・よし」

俺は賽銭をありったけ放り込んだ。

「美夕に会いたい、美夕に会いたい、美夕に会いたい。美夕に会いたい、美夕に会いたい、美夕に会いたい」

「声に出すな、心の中で祈れよ」

「声に出した方が聞こえやすいだろ？相手はじい様なんだ、耳が遠いかもしれない」

俺は更に大きな声で、形振り構わず祈り続けた。見かねたオリンが、俺を引きずり出そうとした。

「頼んだぞ、粗末にしないでくれよ」

「もういいからこっちこい」

「まったく、周りの迷惑を考えるとよ」

「これで届くだろ。716円捧げたしな」

「しつかり数えてんじゃねえよ。それに微妙な金額だ」

俺はやり遂げた時の溜め息をつきながら、木に寄り掛かって座った。これで全てが終わったわけじゃないけど。

「恥じかせて悪かったな」

「いって、形振り構わない人間は嫌いじゃない」

自分でも、こんなことをするなんて思いもしなかった。出来る人じゃなかったはずだ。

分かってる、あの夏からだ。目まぐるしく、自分が変わっているのは。

「オレもお前を見習うか」

「え、何？」

オリンは突然、木に登り始めた。そして太い枝の上に立ち、辺りを見回した。

流石だ、俺とはやることが違う。

「おい凧、上見てないでお前も・・・」

「・・・どうした？」

オリンは身を乗り出し、目を細めて遠くを凝視し始めた。

「凧、携帯を鳴らしてみろ」

俺は言われたとおりに携帯を取り出し、美夕の名前で埋め尽くされているリダイヤル画面を開いて、ボタンを押した。

「・・・間違いない。いたぞ、美夕だ。行列の向こう・・・」

オリンが言い終える前に、俺は走り出した。この機を逃したら、もう二度と会えない気がしたからだ。

体を横にして、人ごみを掻き分ける。人でできた壁を抜け出すと、電話を握り締め、見つめている美夕がいた。

俺はこの瞬間、神様を信じた。

「美夕」

驚いたように顔を上げる美夕。俺は駆け寄りながら電話を切った。  
「やっと・・・会えた」

俺は唾を飲み込みながら、搾り出すように言った。

「凧・・・あの・・・」

美夕は言葉が続かなかった。

分かるよ、俺だって何を言えばいいのかわからない。

俺は荒れる息を抑えながら、無意識に美夕の手を取った。

「手・・・冷たいな」

ずっと、待ってたのかな？

俺は美夕の言葉を待ちながら、両手で美夕の手を温め続けた。

「私・・・電話に出る勇気がなかった」

久しぶりを見る、美夕の白い息。

「携帯で、何度も凧の名前を出したんだけど、ボタンを押す勇気がなかった」

懐かしい・・・そう感じる声。

「見つけてくれるのを待ってた。・・・それってずるいよね？」

「もういいって」

俺は反対の手を取り、包んだ。

「私、考えてみたんだ。自分がもし、世界に旅に出るとしたらって。そしたら、凄く楽しい旅が想像できた。でも、考え続けていたらね・・・凄く怖くなったんだ」

美夕は暖かくなった手で、俺の手を握り返した。

「知らない場所を歩くのって、凄く勇気があることだって分かった。それをやるうとしていいる凧が、凄い人だって分かった。それなのに・・・私は電話に出る勇気すらなかった」

俺の、胸の痛みが変わった。

「もういいよ」

俺は生まれて初めて、好きな人を抱きしめた。

「牧場で待つてよ、必ず会いに行くから」

美夕は俺の胸に顔を埋め、ゆっくりと頷いた。答えを受け止めた俺は、美夕の綺麗な髪に頬を寄せた。

どれ位時が過ぎたか分からない。俺は思い出したように、美夕を見つけてくれたオリンに手を振ろうと顔を上げた。

木の上にオリンの姿はなく、折れ曲がった枝が、風に吹かれて揺れていた。

「・・・どうしたの？突然笑い出して」

俺は笑いながら、美夕から腕を解いた。

「いや・・・何でもないよ。それより、振袖を着て来なかったんだな」

「・・・見たかった？」

「うん、見たかった」

「風がそう言うなら・・・着替えてきてもいいよ」

「よし決まり。さ、行こ行こ」

美夕にわざわざ振袖に着替えてもらい、俺たちは初詣をやり直した。

空白の時間を埋めるように、雪だるまを作り、そばを食べた。そしてもう一度、神様に祈りを捧げた。感謝の言葉を添えて。

ちなみに、おみくじは二人とも大吉だった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

「あれ？父さんは？」

「友達と釣りに行くって言って、錆び付いた釣竿持って出てったよ」

「新年早々？若いねえ」

あの日から、父さんは活気に満ち溢れていた。その変化は嬉しい限りだが、家族の時間も大事にしてほしい。  
・・・今の俺に言えることか？

「凧、ちよつと座って」

「・・・うん」

言われるままに腰を下ろすと、母さんは熱いお茶を出してくれた。

「凧の、将来のことだけどね」

「・・・ああ」

俺は湯飲みに手を伸ばした。

「もう反対しないから、好きなようにしなさい」

「え、本当？」

想定外の言葉だった。

「本当よ。子供のやりたいことを妨げるなんて、親のすることじゃないって思ったのよ。もう子供じゃないんだから、見守るのが親の勤めでしょ？」

「・・・母さん」

「でもね、これだけは分かって。親からすれば、子供はいつまでも子供なの」

母親とはそういうものなのだろう。俺は母さんの言う意味が、何となくだけど分かった。

「それとね、ハラハラしながら見守るのは心臓に良くないから、ちゃんと便りを出しなさいよ」

「大丈夫、分かってる。・・・母さん、本当に嬉しいよ」

この時俺は「神様は本当にいる」とは思わなかった。全て神様のおかげにしてしまったら、努力した意味がなくなってしまう。そう思ったからだ。

「今帰ったぞ。見てくれ、鯛を釣ったぞ」

「買った、の間違いだろ？」

「お父さん、幾らしたんですか？」

2月。

この半年で様々な痛みを知った。本気でぶつかり合う度に、そこには痛みがあった。俺は今まで、その痛みが怖くて衝突を避けていたのかもしれない。けどようやく分かった。その痛みが、未来を作るのに必要不可欠な経験だということ。家族とも、美夕とも分かり合えた。もう思い残すことはないな。

「お前さ、聞き取りはまあまあ出来るけど、発音は悪いな」

「・・・やっぱりそうか」

「聞けても話せないんじゃないか」

「心配するな、通じないときは紙に書けばいい。言葉を伝えられるのは口だけじゃない」

「へえ・・・お前がそんなことを言うようになるとはな」

正直、自分でも驚いている。たった半年で、これだけ変わるなんて、思ってもみなかった。

「変わったのは、お前と美夕のおかげだけだな」

「それは違うぜ。変わったのは、お前がそう望んだからだ」

「そうだけどさ、そのきっかけをくれたのは間違いなくお前と美夕だ」

「きっかけなんて何処にでも転がってるさ。目には見えても、心が動かないから気が付かないだけだ。お前が変わりたいって思わなかったら、オレと美夕が何をしたらって変われなかったと思うぜ」

オリンらしい言葉だ。自分を棚に上げず、全てを対等に見る。大した奴だ。

「それとな、世の中には、言葉を伝えても通じない奴もいる。そういう奴に出会ったら、まず逃げることを考える」

「俺の護身術は通用しないってことか？」



「そうじゃねえ。強いから死ぬ、そういうこともあるって言いた  
んだ。お前は心が強くなった。だけど、果敢に挑むことだけが正解  
じゃない。退くことも大事な選択の一つだ。絶対対に忘れるなよ」  
「・・・分かった」  
「もしお前が誰かに襲われたら、オレはそいつを殺しに行かなきゃ  
いけねえ。オレを監獄に入れるなよ？」  
「ああ、分かったよ」  
俺は照れながら言った。

携帯がブルブルと震えだした。

「美夕だ」

「出るよ」

オリンはみかんを取りながらそう言った。

俺はオリンに手を合わせ、電話に出た。

「はい」

「今大丈夫？」

「ああ」

「今、何処にいるの？」

「オリンの家、言葉を教えてもらってたんだ。美夕は？外か？」  
電話の向こうから、微かに風の音が聞こえる。

「あ、うん。凧の家の前にいるんだ」

「そうなのか？」

「あ、でもいい。また次の機会で」

俺はオリンに視線を向けた。オリンはみかんを食べながら、シッ  
シッと手を振っている。

「今終わったところなんだ。今行くから待ってて」

俺は返事を待たずに電話を切った。

「悪いな」

「さっさと行け」

俺は上着を取り、オリンの家を後にした。

外に出て、自分の家の方を見ると、オレンジ色の明かりが灯った電柱の下に、美夕の姿があった。俺は美夕の傍に駆け寄った。

「ごめんね、勉強の邪魔しちゃって」

「丁度終わったところだったよ。それより、どうかした？」

「これ、渡そうと思って」

美夕は俺に紙袋を差し出した。

「できれば今日の内に渡したくてさ」

俺は紙袋を受け取った。

「開けてもいい？」

「どうぞ」

俺は丁寧にシールを剥がし、袋を開け、掌に傾けた。すると、中から零れ落ちるように、御守りが出てきた。

「これって・・・」

テレビで見たことがある。安全祈願で名高い御守りだ。

「これ・・・俺のためにわざわざ？」

これを売っている神社は、新幹線で二時間は掛かる場所にある。

「わざわざなんて思わなかった。「そうしたい」って思ったら、電

車に飛び乗ってたよ」

「美夕・・・」

「私が出れることはしてあげたい。神頼みでも何でもね」

俺には、神も女神もいるようだ。

「このお返しは、無事に私の所に帰って来ることでいいよ」

美夕は後ろで腕を組み、右のつま先で、道路をトントンとノックしながら言った。

「分かった、絶対に帰って来る。世界に絶対はないのかもしれないけど、これは絶対に絶対だ」

揺るぎない何か、俺の中に現れた。

「それともう一つ、お返しにしてほしいことがあるんだけど、分かる？」

俺は何も言わず、美夕を腕の中へ誘った。

「ん・・・正解」

満ちゆく気持ちを表すように、力を込める。

「思い残すことはない」その言葉が今、嘘に変わった。このままじゃ、後悔してしまおう。

「これだけじゃ・・・足りない」

素直に、そう洩らした。

「・・・私も」

「これから・・・」

「・・・うん」

3月。

卒業式。

長老の長い話を聞き流しながら、三年という月日を思い出している。高校に入学した頃は「長い三年が始まる」と思っていた。けど、高校生活のことを思い返すと、あっという間に、今に到着してしまう。短い。本当に短い。

でも、そう感じるのは、俺に思い出が少ないからだと思う。強い感情が残るほどの生活ができなかったからだ。だから、俺の高校生活の思い出は、最後の夏から始まる。それはそれでいいのかもしれない。

「皆さんは、ここから旅立つのです」

何故かここだけはハッキリと耳に届いた。

旅立ちか。本当にそうだな。

もし私が渡り鳥なら、思い出を頼りに、海を渡り帰り、思い出の止まり木で、羽を休めるのだろうか。

ふと、頭の中に詩が浮かんだ。俺の詩じゃない。いつかどこかで聞いた詩だ。

・・・思い出せない。ただ懐かしさだけが胸に響いている。

「なあオリン。この詩、どこかで聞いたことないか？」

気になって仕方ない俺は、ヒソヒソとオリンに話しかけた。

「ああ、知ってるぜ。お前と美夕とオレの三人で聴いたことがある」  
「え？いつの話だ？」

「覚えてないのか？ラジオから流れてた曲だぜ？渡り鳥って曲だ」  
強い日差しを感じる。風が吹いている。ざわめく草の音が聞こえる。セミの声が聞こえる。俺たちの声も聞こえる。壁に吊るされたラジオから、美しい音色が聞こえる。

「これは元々、ピアノだけの曲なんだぜ。それを誰だかが、詩を付けてカバーしたんだ。それを聴いたんだ、あの夏にな」

そうか、どうりで懐かしく感じるたわけだ。やっぱり俺の思いでは、あの夏から始まる。

「でもよ、その曲はすべて異国語で歌われているんだぜ。だからこの詩は、お前が訳したことになる。つまりだ、それはお前の詩ってわけだな」

俺の詩・・・かあ。

「おい風、ヤバイ、委員長が睨んでる。黙っとこうぜ」

横目でチラリと美夕を見ると、少し怒った顔で、唇に人差し指を当てていた。

この机に頬杖を付くのも、今日で最後になる。ここも思い出の止まり木になるのかな。

今思えば、俺はいつもここでオリンと話していた気がする。

今思えば、俺はいつもここで美夕を眺めていた気がする。

「・・・・・・・・」

俺の止まり木は、あいつらの間にあるんだな。帰る場所があるのなら、迷っても怖くない。

強い陽射しに目を細めると、心の中で、手を振るオリンと美夕が見えた。

卒業の日なのに、もうすぐオリンと美夕と会えなくなるというのに、俺はほとんど寂しさを感じていない。

リアルじゃないから？

違う。

軽薄だから？

違うよ。

寂しさが限界を超えて、何も感じないからか？

それも違うな。

じゃあどうして涙を流さないんだ？みんな離れ離れになるのにさ。オリンも美夕も、一人ぼっちの時はどうすればいいのか、教えてくれなかったぞ？

俺は自分に答えを教えるように、空を眺めた。

俺たちは、あそこに手が届いたんだ。少しの間とはいえ、空に行つたんだ。この世界には国が沢山あるけど、空は一つしかない。世界中、どこへ行っても空は一つだ。何処にでも、何処までも繋がっている。

立っている場所は違っても、同じ空の下にいるんだ。だから俺は「一人じゃない」って思うことができる。これからもずっとな。

どうしても寂しいときは、目を閉じて深呼吸すればいい。そうすれば・・・また夏が始まるよ。

「・・・なるほどね」

俺は思わず声に出してしまった。

「何が「なるほど」なんだ？」

卒業証書を脇に抱え、ポケットに手をつ込んでいるオリンが、俺の席の前に立っていた。先生の長い話とはつくに終わっていたよ。うだ。

「自問自答に答えを出したんだ。もしかしたら、生まれて初めてかもしれない」

オリンは溜め息を吐きながら両手を小さく掲げた。そして、俺の前の席の椅子を、音を立てて引き、鼻で息を吐きながら座った。前にもこんなことがあった気がする。

「手、出せよ」

俺は言われたとおり、右手を差し出した。するとオリンは、勢い良く俺の手を握った。

「・・・サン」

「何も言うなよ、オリン」

俺は強くオリンの手を握り返した。

俺たちは笑い合った。互いを。自分を。

「凧、また空見てたでしょ？」

美夕は腰に手を当て「やれやれ」といった顔をしている。

「だってさ、卒業の日だぞ？誰だって想い返すよ」

「ん・・・まあね」

今度は「困った子ね」という顔をした。

「過ぎし夏の思い出か？」

オリンはそう言いながら、内ポケットから一枚の写真を取り出した。

「あ、俺も持ち歩いてるよ」

俺は財布から、折り曲げられた写真を取り出した。

「私も」

美夕は生徒手帳を開き、写真を取り出した。

「・・・」

みんな、同じ写真を持っていた。

「同じ夢を叶えたよな」

夏の軌跡を巡らせる。

「また行かなきゃね」

あの夏の扉絵。

「いいチームだぜ。オレたちはな」

ウインドベルと、俺たちが写った写真。

また、空を見上げた。この止まり木から、飛び立つために。

「行こう。未来が待ってる」

「だな」

俺とオリンは席を立った。

「また・・・始まるんだね」

もう二度と、歩かない廊下を歩く。

もう二度と、通らない階段を下りる。

もう二度と、履かない靴を脱ぐ。

春の陽射しが、俺たちを包んだ。

終わりと始まりを迎えるために、校門へと歩む。

「なあ、この門を越える前によ、約束してほしいことがあるんだ」  
「何だ？」

「オレはこの町に残る。美夕はあの牧場に行っちゃまう。凧は、俺たちの知らない場所を歩く・・・けどよ、また絶対に会おうぜ」

オリンは拳を差し出した。

「絶対の約束だ。また会おう」

「約束と言うより、誓いだね」



俺と美夕は、オリンと拳を合わせた。

「私も、約束してほしいことがある」

美夕はゆっくり目を閉じ、ゆっくりと見開いた。

「また飛行機作って、空に行こう」

「おう、誓うぜ」

「俺も誓うよ」

再び、俺たちは拳に力を込めた。

「凧は？何かない？」

「・・・そうだなあ」

「言えよ」

想うことが多すぎて、うまく言葉に変えられない。

「・・・・・・」

何を言えば、全てが伝わる？

「・・・・・・」

きっと、何を言っても、何も言わなかったとしても、全てが伝わるんだろっな。

「それぞれの道を、それぞれの未来を、絶対に諦めない」

「誓うよ」

「誓うぜ」

もう一度、拳に力を込めた。

「行こう、新しい世界へ」

俺たちは校門を飛び出した。これで一つの終わりを迎えたことになる。そして、新しい始まりを迎えたことになる。

それぞれの前にある、新しい舞台。でも怖がらなくていい。

一人じゃないから。

大切なものが、胸の中にあるから。

同じ、空の下にいるから。

また、必ず会えるから。

## 悠久の風

### 悠久の風

冷たい風を避ける為に訪れた店。流行っていない異国のパブ（居酒屋）で、俺は風変わりな人と出逢った。

（・・・こんな所で）

ギターを弾き語る日本人。しかも、お構いなしに日本語の曲を弾き続けている。

（・・・知らない曲だな）

赤提灯あかちようちんに誘われたサラリーマン。ネクタイを緩めて、店に流れるラジオを聴きながら溜め息をつく。そんな感じだ。

曲が終わると、まばらな拍手が起こった。俺も合わせて拍手を贈る。

「彼」は拍手が鳴り止むと、すかさず次の曲を演奏し始めた。

「！」

それは、Cコードから始まる、ジャズの歴史的名曲。あまり聴かないジャンルだったが、この曲は知っていた。あの夏、ラジオから流れていたからだ。

「・・・、」

草原を吹き抜ける風の音。

作業場の柱から流れ続けていたラジオ。

ふと足を止め、聴き入るあの瞬間。

夏の足音と一緒に聴いた、思い出の音。

リズムに乗せた、美夕の鼻歌が聴こえる。

「・・・う」

俺を見て、口元を緩めるオリン。

「・・・うって」

その時・・・俺は胸が鳴っていた。

「ようって」

（！）

「あ・・・っと、」

「あんだ、日本人だろ？」

「あ、」

言葉が出ない俺は、何度も頷いて答えた。

「俺より若そうだ、いくつだい？」

「七・・・、」

久しぶりに聞く日本語。答えが出て来ない。片言の英語が浮かんで来るだけで。

「・・・21、です」

「・・・大丈夫か？」

「、はい」

いつの間にか演奏は終わっていて、さっきまで弾き語っていた日本人が、今は俺の隣にいる。

「すみません。こんな所で、同じ国の人と会うとは思ってなくて」

「そうか？日本人なんて何処にでもいるぞ」

「そうですか？」

「ああ、ここでは日本語しか出来なくてもここでは生きていける」それは同感だった。単語を並べるだけでも何とかなる。現になっ

ていた。

「それに、日本で買える物は大抵手に入るしな」

確かに。さつき豆腐見かけたし。探したらおにぎりもありそうだ。  
「もつと注文しな、奢るよ」

彼はそう言つて、メニューを差し出した。

「あ・・・すみません、読めなくて」

「適当に頼めばいいさ。これも出会いだ」

そう言つて、彼はメニューを指差していくつか注文をした。そんな姿の彼に、俺には無い樂觀さが見えた。

(・・・いいな。こういうの)

「なあ、聞かせてくれないか？」

「・・・何を？」

「さつき、音楽を聴きながら思い出していたことをさ」

今まで、あの夏のことを誰にも話したことは無かった。何故なのか、自分でも分からないけど。

「いいですよ」

思い出させてくれたこの人に、話したいと思った。故郷の裏側で今、この場所で。

今までで、最も輝いていた記憶。誰にでもあるであろう、その瞬間、その一時。

思い出す度に空を見上げてしまうその記憶は、異国の空ですら、その瞬間の空に変えてしまう。風の匂いも、心の姿も。

「なるほどね。いい話じゃないか」

彼はそう言つて、頼んだカクテルを飲み干した。

「それで？故郷が懐かしくないか？」

「・・・故郷」

不思議と、あの家が思い起こされた。赤い屋根の家。白いポーチ

がある家。軋む階段の音。砂埃をかぶった、古い車。

「ま、故郷が一つとは限らないさ」

彼は俺の思いを見透かして言った。

「……そのようです」

「順番、逆になったけど、名前は？」

「……凧。……あなたは？」

そう問い返すと、彼は天井を指差した。

「空。卯月、空」

二月の空。彼はそう答えた。

「君の仲間になれそうな名だろ？」

「、そうですね。不思議な縁を感じます」

「そうだな。異国の空の下で出逢ったしな」

……店の中だけだ。

(思うだけにしておこう)

「空さんは、どうしてここに？」

「君と同じで、「その時」が来たからさ」

「聞かせて下さいよ」

「ん……まあいいけど、」

空さんは壁に掛けられた時計に目を向けた。針は12時を指している。

「もう店じまいだ。場所を変えよう」

そう言って席を立ち、マスターと話し始めた。流暢な言葉で、俺の語学では聞き取れない。僅かな単語ですら、耳をすり抜けていく。

「行こうか」

「あの、会計は？」

「ああ、1時間演奏するから、飯を振舞ってくれ。それが俺とこの店の契約だ」

「……なるほど」

培った技能で生きる。凄いことだけど、それ以上に契約の内容に驚いた。

俺は空さんの後に続いた。

外は冷たい風が吹いていた。ポケットに手を入れ、肩を上げて白い息を吐いた。息を吐く音が震えて揺れる。

「寒いな。酔いが覚めていくよ」

俺には分からない感覚だ。

「もう宿は取ったのか？」

「いえ・・・まだです」

「なら、俺が世話になってるホテルに来いよ。タダで泊まれるぞ」頭に「契約」の言葉が浮かび上がった。

「何をすればいいんですか？」

「一日掛けてホテルを掃除すればいい。それだけだよ」

そんな方法、思い付かないよ。普通は。

「同じ部屋でいいから、つて言えば何とかなるだろう」

彼がそう言うと、本当にそんな気がしてきた。

（ちよつと・・・羨ましいな）

そんな生き方が出来る彼を、俺は慕い始めていた。対極と思えるその性格に、引かれ始めていた。

（その時・・・か）

彼にどんな瞬間があったのか。それを知りたくて仕方なかった。

それすらも・・・俺と対極なのだろうか。

（思えば・・・遠くへ来たもんだな）

考えてみれば、名前も知らない場所を歩き続けていた。初めて見るものばかりで・・・と言うか、そんな事ばかりに目が向いた。

気が付けるようになった。という言い方が正しいのかもしれないか。今だって、安いホテルに知り合ったばかりの人と一緒にいる。

(こつも驚くことが続くと・・・慣れてくるモンだな)

部屋に携帯の充電が完了したときの音が鳴り響いた。

手に取って開いてみるが、相変わらず電波がない。

(海外でも使えるかどうかなんて・・・契約の時に確認しないってと、思い返したところで電波は生まれぬい。

「・・・」

みんなとは、日本を出てから一度も連絡を取っていなかった。

(帰ったら殴られそうだな)

その代わり・・・と言うか、メールボックスには未送信の文章が山ほどある。

(届かない手紙・・・)

読み返してみると、自らの足跡が全て分かった。行った場所も、思ったことも・・・想ったことも。全て青い言葉で綴られていた。その言葉は全て、届けられずにここにある。

(・・・その時って、いつなんだろう)

そんな心の声に答えるように、空さんがシャワーから出てきた。

「バスタオル一枚しかないんだ。別に、いいよな？」

「ええ、気にしません」

「君も入ったら？」

「朝にします。今入ったら・・・風邪引きそうですから」

ここは暖房の無い部屋。とは言え、タダで雨風を凌げるのなら文句は無い。

「それもそうか。病院に行く羽目になったらヤバイしな」

俺はそそくさと携帯を閉じ、ポケットに突っ込んだ。

「ところで、いつ国に帰るんだ？」

「・・・っと、まだ、分からないです」



動揺しながらそう答えた。

「まあ、分からなくてもないがね」

何が?と思っただけど、口にすることは出来なかった。

「ほら、コーヒー」

「あ、すいません」

「ルームサービスは無いけど、お湯はあるからな」

彼の入れたコーヒーは香りが良く、濃い味わいがした。

「もう3年になるって言っていたな」

「はい」

「色々と学んだろ?」

「・・・そう、ですね」

「じゃあ帰らない理由って何だ?まだ見たい、知りたいことがあるのか?」

「・・・っと」

答えられなかった。これと言えるのは無かったからだ。有りもしない理由を答えるのも嫌だった。

「国に帰って、彼女と農場をやっていくのが嫌なのか?」

「そんなこと、ない」

「が・・・不安はあった。」

「無いのは決意か?」

「・・・」

その通りだった。

自分でも分からない、言葉に出来ない気持ちがあった。その正体が分からず・・・ただ切ない気持ちに心を縛り付ける。

「済まない、こんなことを言っつもりじゃなかった。でも、何となく・・・昔の俺と似ている気がしてね。それでさ」

「いえ、」

「俺の話をするんだったな。俺の「その時」の話」

「聞かせてくれるなら」

「俺は山に囲まれた田舎で生まれた。いわゆる、盆地ってヤツだ。隣町に行くには国道を通るしかなくてな、車がたくさん走っているから自転車では通るなって学校から言われていた」

空さんは語りながらタバコに火を点けた。立ち昇る煙が寂しげに天井に届く。

そんな風を感じた。

「だから、あの田舎町が全世界だった。そんな暮らしたっただな」

(・・・)

何となく・・・分かる気がした。他を知らない、あの頃の自分が脳裏を過ぎる。

「中学一年の時だ。ちよつと・・・気になる子がいてね。と言つても、恋愛感情かどうかは分からない。ただ・・・その子を見ていると、気持ちが向いてしまうんだ」

それも・・・ちよつと分かる。自分の気持ちが分からない、そんな心。

「夏休み最後の頃の朝に、その子を見かけたんだ。俺が声を掛けたら、「・・・帰りたくない」ってその子は言った。朝からそんなことを言うなんておかしいなって思ったけど、何も聞かなかつた」

タバコの煙を吐く息が、溜め息に聞こえた。

「俺はその子を自転車の後ろに乗せて走った。行き先も考えずにただ走った。・・・そして、町外れの国道に行き着いた」

「俺は止まらず駆け抜けた。遠くへ行きたいなら、叶えてあげようと思つてな。緩やかな坂も、急なカーブも、構わずペダルを漕ぎ続けた」

俺は息を飲んだ。空さんに呼応するように。

「その子は・・・何も言わなかった。ずっと遠慮しながら俺の服を摘んでいたよ」

何もかもが・・・自分の記憶と繋がってしまおう。そして祈ってしまおう。ハッピーエンドであるように、と。

「夕方になる少し前くらいに、俺たちは河原に辿り着いた。ススキが一面に並ぶ大きな河原だ。その光景を見たその子は、小さく声を上げた。・・・そして、自転車を降りた」

空さんは根元まで辿り着いたタバコを灰皿に押し付けた。そして次のタバコをくわえ、ライターを手に取った。・・・でも、感情を抑えるように息を吸い込むと、彼は火を点けずに手の平でライターを握り締めた。

「ススキは・・・しゃがんだ俺たちと同じくらいの背丈でな、見えそうで見えない向こう岸を・・・二人ですっと眺めていたよ」

彼は鼻で笑うように、短い息を漏らした。

「そしてそこが家出の終点。俺たちは警察に補導されて、親を呼ばれた。彼女の親は「そこまで行けない」と答えてな、結局、俺の親父の車で送る事になった」

そこまで一気に吐き出し、タバコに火を点けた。

「・・・悔しかったよ。俺が必死に半日掛けて歩んだ道を・・・たった1時間で、大人は追い越してしまっただからな。・・・でもそれ以上に・・・どこか諦めたような彼女の顔の方が・・・胸に刺さった」

もう・・・何も想えなかった。

「初めて・・・悔しさで拳を作ったっけな。親父は家に帰った後、そんな俺に何も聞かなかった。そして車に俺を残し、先に家に入った」

俺の親父も・・・そうしたかも。

彼は静かに煙を吐き出した。どう、声を掛けていいか分からない俺は、ただ沈黙を共に過ごした。

「その子は・・・その日に亡くなった。親に暴行されてな」

全身を冷たい風が駆け抜けた。荒れ狂う鼓動が激しく胸を叩いた。押さえ付けるようにシャツの胸元を掴んだが、鼓動が拳から漏れてくる。

「葬式の時・・・その子の親父に殴りかかったけどな・・・。子供の拳は、大人には届かなかった」

俺はこの拳を・・・誰に向ければいい？

「それが・・・その時」？

「その時・・・だったのかもしれないな。でも、青いガキは一人では何も出来なかった」

乾いた空気が喉に張り付く。俺は思い出したように、コーヒーを流し込んだ。

「あの子から死を学べなかった。理解も消化も出来ない複雑な心理だけが残った」

その痛みに耐えるように、俺はカップを強く握り締めた。

「それから10年以上後の話になるが、俺の親友が事故で亡くなった。それを境に、当時いつも一緒に遊んでいた仲間と会う回数が減って行った。仕事が忙しくなったりとか、出世したりとか、そんな理由もあってな」

大人の現実、なんだろうな。

「ある日、その親友の部屋から手紙が見つかったんだ。仲間に出そうとした手紙でね、中には写真が何枚か入っていた。それと、「捜してみる」ってメッセージ。その写真の一枚に、あのスキの場所があった」

繋がった。

「その場所に仲間と車で行って・・・俺は初めて向き合った。子供の頃に生まれてしまった、複雑な心理と」

(・・・)

「そして今、ここにいる」

「どうして・・・国を出たんですか？」

「それは秘密だ」

と言つて、空さんはカップを唇に当てた。

「それを知ったら、この物語を読む楽しみが減ってしまうからな」

(この・・・物語?)

誰かへのメッセージ。そんな気がした。

「まあ、何の為に生きているのか分からないとか、死んだように生きていたとか、そんな時だったからな、思う事や、学ぶ事は多かったよ」

それが・・・今へと導いたのだろう。後悔の無い彼の姿に、俺は自分が小さく見えた。

「誰だつて将来は不安なもんさ。その不安を何もせずに持ち続けると、そんな生き方になってしまう。君も片足突っ込んでいるんじゃないか？」

・・・凶星だった。

「思い当たるか？」

「・・・まあ」

「俺たちは・・・人が創った物の上にいる。このホテルもそう、ギターもそう、紙もペンも、誰かが創った物だ。未来には何もかもが必要なのさ。農家だつて人を育むには欠かせない存在だ」

(・・・育む)

(人はこうやって生きていくんだな)

あの夏・・・心から漏れた言葉。あの時、あの瞬間に学んだ事を・・・俺は忘れていやしないか？

「金の価値と、生きることとは別だぞ？俺がその証明だ」

何もかも分かっているように、彼はそう言った。

「心に従え。命を学んだ者ならできる筈だ」

彼のその言葉で、今宵は幕を閉じた。

白々と夜が明ける頃、俺は静かに目覚め、ぬるいシャワーを浴びた。寒空とは違い、あの夏の記憶が心の中を飛び交っていた。

(釣りしたり、野菜を育てたり、家畜の世話をしたり、物々交換したり、コロッケをサービスして貰ったり・・・空を飛んだり、か)単純に・・・戻りたかった。繰り返したかった。

始まりはそれでいいのかもしれない。不安な未来を想像したって・・・何も生まれはしない。

(道を知っている。ということと、実際に歩くというのは違う。・・・)

この旅で、最初に学んだことなただけだな

蛇口を捻ると、「ドン！」とウォーターポンプの音が鳴った。

「うるせ！」

「・・・よう、今何時だ？」

シャワーから出ると、寝ぼけた空さんがベッドの上でそう唸った。

「7時です」

「・・・もうそんな時間か」

「コーヒー、入れますよ」

「ん」

そう喉を鳴らした。そしてタバコに手を伸ばす。

「ホテルの仕事は何時からですか？」

「8時だな。8時から5時まで」

「その後はまた演奏に？」

「そう。その生活が結構気に入ってたんだ、しばらくはそうする。宛てが無いなら君も一緒に歩むかい？」

「……いえ、宛てなら出来ました。たった今」

「……そうかい」

目を細めて煙を吐く空さん。

「エアメールの出し方、教えてくれませんか？」

「……おうよ」

今がその時、そう確信した。

(もう迷わないよ)

## 追憶の風

### 追憶の風

淀みない風。

カラツとした夏の熱気。

そして、ハーモニカの音。

(やっぱ、夏はいいな)

宿舎の屋上に吹く夏の風。それに触れるように背を伸ばす。

時折、風の音がハーモニカから伝わってくる。

(巧いモンだな)

仰向けになって空を見上げた。雲の無い蒼天に手を伸ばし、掴むように拳を握る。

(・・・オレだけじゃないだろうな)

拳を解き、空を手放す。

(空を見上げているのは)

遠くの空に、欠けた白い月が浮かんでいる。あの遠い場所ですら、かつて人が立った場所だ。

(人が初めて空を飛んだ78年後、人は別の星に立った・・・だったか)

空を見るたびに無限の可能性を感じる。空に残した足跡は、それを証明している。

風が止むと同時に、ハーモニカの音も止んだ。

「大したモンだな。聞き惚れたぞ」

オレは跳ね起き、奏者に近づいた。



「誰でも出来るさ。この位な」

「オレにもか？」

「勿論」

そう言っただけ俺たちは屋上の手摺に肘を付き、遠くの空を眺めた。

「ハーモニカで……初めて宇宙に行った楽器なんだとさ」

「へえ、初耳だ」

「それを知って、楽器屋に走った奴がいましたとさ」

「それも初耳だ」

嫌いじゃなかった。こういう風も。

「今日までだったな」

「ああ。明日からは酒蔵の後継ぎの人生だ」

と答え、荷物を詰め込んだバックに軽く蹴りを入れた。

「夢を偽って生きるのは辛くないか？」

「仕方ないさ、長男の宿命って奴だからな。それに、案外楽しいかもしれない」

「自分の夢よりもか？」

オレの目は自然とハーモニカに向いた。共に空へ行こうとしていた相棒に。

「……言っなよ」

「なあ、空に手が届くって……どんな気分だ？」

「そりゃあ……」

オレは声を閉じた。

「自分で知れ！」

語る言葉を知らないというのもあったが、それよりも、自分で体感してほしかった。

「、言ってくれるな」

「いつか一緒に行こうぜ。オレが造った飛行機で」

「なら迎えに来てくれよ、その飛行機で」

「いいぜ、約束だ。但し、人力だからな、体は鍛え続けておけよ」

「ああ、いいとも」

「そつだ・・・お前に渡すものがある」

「あん？」

バックを開け、中から小さなケースを取り出し、オレに投げ渡した。

「・・・何だ？」

開けてみると、あいつと同じ銀色のハーモニカが入っていた。

「・・・いいねえ」

「お前も精進しろよ、いつか空で吹こう」

そういう馬鹿げた約束は、妙にオレの性に合う。

「楽しみにしとけ！」

「もう、行くよ」

「・・・ああ」

「明日から山岳訓練だったな。相当キツイって噂だから、気を付けるよ」

「問題ねえよ、それよか自分の心配しな」

「それもそつだな・・・じゃあな、オリン」

「・・・じゃあな！」

別れてからしばらくの間、オレはただ静かに空を眺めていた。いつか戻る場所である、空を。

「・・・？」

震え出す携帯をポケットから取り出して、仰向けのまま空へ翳した。開くと「メールが届いています」の文字が。

「・・・！」

オレは勢い良く跳ね起きた。そんな文章だった。

「来たか・・・その時が！」

・・・  
・・・  
・・・

「あゝこちらオリン。山岳訓練中、部隊が全滅。至急、救援を求む」

えらい事になった。

「何があつた？詳しく話せ！」

始まりは・・・昨日の夜だ。

先輩が山菜を取りに出たところ、多数のキノコを発見。毒々しい気配がしたけども、先輩は「虫も食ってるから大丈夫だ」と言つて持ち帰つた。

最初は皆が警戒したものの、「虫が食つてたんだ、人が食つても大丈夫だろ」の一言に「確かに！」と皆が口を揃えた。

他にも、「ナスと一緒に食べれば大丈夫って聞いたことがある」と言つ声も上がった。「なら問題ない！」と皆が口を揃えた。

（全て迷信です。信じないように）

結果、皆がバタバタと倒れ始め、部隊はオレ以外全滅。

「・・・という訳ですよ」

「ですよってなあ・・・。場所は何処だ？へりを向かわせる」

「場所は、」

答えようとした時、無線からノイズが消えた。

「・・・もしもし？」

無線機に目を向けると、「電池を交換して下さい」の文字が。

「っざけんな！」

オレの脅しも虚しく、無線は物言わぬ箱となった。

(・・・どうするよ?)

皆に目を向けると、様々な症状が出ていた。

寒そうに、小刻みに震えている者。「あ、そこ、キノコでるよ」と誰かに話しかけている者。笑っている奴もいる。

(キノコを全部ぶち込んで鍋したからなあ)

「笑ってんじゃねえよ」

(笑っているのではなく、顔の神経がマヒしているのです)

(とりあえず・・・生きなきゃな)

「・・・さて」

毒ごときに負けないオレは、薬草と食料を探しにキャンプ場を出ることにした。

必要なのは解熱、滋養強壮、腹の痛み止め。そんなところだろう。

(・・・つつてもなあ)

どれが薬草だか分からない。幼い頃に親父に教わったこともあったが、随分昔の話だ。

「おっ、これ食ったことある気がするな」

どこか見覚えのある草が生えていた。

「これもだ・・・これも、か?」

全部そう見えてくるから不思議だ。

「・・・とりあえず、全部食わせてみるか」

(それは止めましょう)

次は食料。携帯食だけでは栄養が満足に取れない。何か力が付く物を・・・。

(・・・川の音)

近くで水の流れる音がする。耳を傾け、音のする方に近づいてみた。

「やはりか」

オレは綺麗な水が流れている川に辿り着いた。早速手で掬ってみた。

「……ん、飲めるな」

山は自然の浄水場だと、あの夏に美夕が言っていたのを思い出した。

(あいつが一番サバイバルに向いているかもな)

そんな事を考えると、別な思い出が浮かび上がった。

(そういやあ……釣りしたな)

透明な川には魚が泳いでいた。目で見えるほど鮮明に確認できる。

「……」

ここには針も糸も、網も無い。

(となると……槍か！)

(この場合は「モリ」です)

オレは適した枝を探しに山へ戻った。

あの夏、オレは一匹も魚を釣ることが出来なかった。

(それで蟹取ったり、タコと格闘したりしたんだっただんな)

今回はそうは行かない。仲間の命が掛かっている。

(釣る、じゃなく、刺す、だからな。多少は有利なはず)

と思いながら枝を拾い上げた時だ。草と葉の音を立てながら、オレの前に4つ足で歩く一匹の生物が現れた。

「……猫か」

そうポツリと呟くと、その生物は俺の目の前で、2本足で立ち上がり、前足を振り上げた。

「……でっけえ猫だな」

(熊です。猫目ですけどね)

「いや・・・熊だ！」

と叫ぶと、熊も驚きながら前足を振り下ろした。

(！)

風が顔を横切る。風圧で体がよろめきそうだ。

(流石に・・・ヤバイか?)

距離を取って身構えると、熊は前傾姿勢を取り、獲物を射抜く目でオレを睨んだ。

(勝てるか?・・・親父より強そう!)

考え終わる前に、熊はオレ目掛けて走り出した。

(やるか!)

その覚悟が集中を磨ぐ。構えて迎え撃つ。熊が己の間合いに入ると、さつきと同じように前足を振り上げた。

(碎いてやる!)

左足を大きく踏み込み、熊のなぎ払いを避け、と同時に拳を振り上げる。

ゴツ、つと鈍い音が耳に届いた。拳に伝わる、顎を捉えた感覚。

(・・・!)

オレは再び距離を取った。

「・・・痛てえ」

熊の顎を打った拳が悲鳴を上げている。それに、避けた熊の爪は、オレが背にしていた木をえぐり取っていた。

(こりゃあ・・・)

「無理だ」

オレの一撃が効いている様子も無い。むしろ、熊を怒らせただけのように思える。

再び、前傾姿勢を取る熊。

(もう一発、いや・・・死ぬって)

熊が踏み出した瞬間、オレは本能に従い、背を向けて走り出した。「着いて来れるか!100Mを10秒5で走るオレの足に!」

異常な集中力が、筋肉の繊維一つ一つまで活性させているのが分

かる。

(自己ベストが出そうだけ・・・?)  
隣で荒い息が聞こえる。チラツと目を向けると、熊はオレに並んで走っていた。

(熊の足は時速40K。オリンは34、28K。熊の勝ち)  
「・・・やるじゃねえか」

熊は走りながら腕を振り上げる。そしてその隙を、オレは見逃さない。

交わすと同時にスライディング。熊の足を払う。

熊が転倒した隙に、オレは木の上へ駆け登った。そして息を潜める。

(参ったな・・・逃げられねえ)  
やるしかないか・・・?

(そう言えば、熊の胆嚢たんのうは病気にいって聞いたことがあるな)  
みんなを助けられるかもしれない。太い枝の上で、仲間のことを思い浮かべる。

「やはり・・・狩るか」  
覚悟を口にした瞬間、

「っ！」  
熊は俺の目の前にいた。

「ここ、木の上だけ？」  
(熊は木登りが得意です)

熊は答える代わりに荒く息を吐いた。そして腕を振り上げる。

「！」  
慌てて木から飛び降りる。そして一目散に走り出した。

(二度も背を向けるとは・・・情けねえ)  
と思ったのも束の間。背中に地響き伝わってきた。と同時に、大地を揺らす足音。

(狩られるのはオレの方か?)

極限の心理が更に足を加速させる。

(こんな所で・・・)

森林の出口が見えてきた。その先にはさっき見つけた川がある。

(オレは・・・)

日の光で水面が輝いている。目を細めながらもオレは・・・。

(死ねないんだよ！)

跳んだ。空を駆けるように。

着地と同時に前回り受身。即座に身構えた。

(跳んだ・・・。こっちは来れないだろう)

と思つた瞬間、熊も川にダイブ。

(無理だろ?)

予測どおり、熊は勢い良く飛沫を上げ、川の真ん中に落ちた。

(よし！)

と、喜べたのは一瞬だった。

(！)

川は結構浅く、熊は起き上がって歩いて川を渡った。

「~~~~」

川の中の石に打つたのだろうか、熊はあばらを押えている。

「そこで鮭でも取ってるよ」

俺の声が届いたのか、熊は再びオレに狙いを定めた。

(取りあえず・・・逃げるか)

オレは再び森林の中へ駆け出した。

(ヤバイ・・・つつか卑怯だろ？オレには爪も牙も無い。対等じゃねえよ)

岩陰に身を潜め、息を殺す。

(相手の流儀に合わせて本気でやるのが夏野流。そっちがその気なら・・・)

不穏な足音が近づいてくる。



(弱点を突くか。熊の弱点って何だ?)

鼻を鳴らし、辺りを探っている。

(やっぱ・・・猟銃と巴投げか?)

(それは、やられかた、でしょ?)

(何かないか?)

上着を探ると、手に当たる冷たい触感が。取り出してみるとナイフだった。

(これは・・・ちょっとな)

冷たく輝くナイフを見て、ふと思う。

(本当に・・・殺すのか?・・・と言うか、出来るのか?)

冷える精神。頭から熱気が引いて行くのが分かる。

(命を殺めるって・・・単純じゃない)

ナイフをしまい、他を探る。すると、小さなケースが出てきた。

(・・・あいつに貰った、)

ハーモニカだった。

(・・・そうだ。熊は慣れない音に強い警戒心を抱くって、美夕が言っていたな)

一縷の光が見えた。ケースからハーモニカを取り出した。のだが、

(・・・吹けねえや)

と、落胆した時だ。木々を揺らす風が吹いた。山を吹き抜ける風は、余すことなく全てを撫でて行く。

(夏の匂いがする)

そう心の中で呟くと、風はハーモニカを通り、音を立てた。

(風の音)

ハーモニカを目の前に翳すと、その音はより鮮明になった。人の唇では出せない不思議な音を奏で、山に聞かせている。

(この風の匂い・・・何処かで)

オレは風と一緒に髪を撫でながら目を閉じた。風の音、山の音。

あの時と同じ、風の匂い。

「いのししじゃない。何処から連れてきたのよ？」

「野生の動物を、人の住処に連れてきてはいけないの。人に慣れたら、動物は森を出て穀物を荒らすようになるの。それがどれ程農家にとって大変なのか分かって」

「人と動物の共存ってというのは、一緒に暮らすことだけじゃないの。互いの住処に踏み入らないことも一つの共存。私はそう思うよ」

（あの時の・・・風か）

それに気が付くと、一つの足音が森の奥へと遠ざかって行った。

（ここ、お前の住処だもんな・・・。そりゃ怒るよな）

大切なことを忘れていた。

（あのとき誓ったのにな、）

何とかキャンプ場に戻って来れたものの、状況は変わらない。念の為、と思って無線をいじってみたが、ウンともスンとも言わない。（つたく・・・換えの電池くらい備えろよ）

と、無線を乱暴に押し倒した。するとその衝撃でカバーが外れた。

（・・・）

ふと、蘇る記憶。

（・・・）

オレは剥き出しになった電池を外し、場所を入れ替えてみた。

（更に！）

はめ換えた電池を指先で転がす。

（風、お前ん家のリモコンはこれで動いたよな？）

祈りを込め、電源を入れると・・・。

「オリン、応答しろ」

ノイズが酷いを通じた。

「おおおっし、人の英知をナメんなよ！」  
と高笑い。

「こちらオリン。部隊は今、第5キャンプ場に在しています。至急、  
救援を・・・」

「情けないな。山岳訓練で救助が必要になるとはね」

「・・・すみません、」

救助された後、ヘリの中でそう言われた。

「まあいいさ、お前はな」

「どういう意味です？」

「安易にキノコを食う。万一の供えが不足。その結果、部隊が危険  
に晒された。お前がいたからいいものの、下手すれば死人が出てい  
た。その責任は重いさ」

(・・・みんなの責任だろ)

誰かが責任を取る。何処と限らず、それは存在する。

そんな事とは関係なく、今日も空は燦然と輝いている。

「・・・空が初めてなのか？」

「いえ、」

「・・・そりゃそうか」

上官はオレの容姿を見てそう言った。

「お前の噂は聞いているよ」

「自分の、ですか？」

「ああ。腕相撲で全員倒したんだろ？」

「・・・はい。お陰でいつも昼飯は食い放題です」

「他にも、勇猛果敢、伝統墨守、用意周到とか、色々と言われている」

どうだかなあ。が、その言葉への第一印象だ。

「航空自衛隊にこないか？」

「と、言いますと？」

「昇格して俺の下に来说いと言ったんだ。空に来说いとも言えるがね」

(・・・空へ、か)

ふと空に目が向いた。見上げない空は3年ぶりになる。

あの時と違つて、空にはけたたましい程のプロペラ音が散らかっている。

(今・・・何処を歩いている?)

オレは二人を捜すように大地を見下ろした。

二人とも、オレの知らない場所を歩いているのだろう。異国の路地裏だつたり、自分で決めた道だつたり。

「少し・・・考えさせて下さい」

「なんだ、握り飯が好きか？ハンバーガーの方が似合つと思つたけどな」

「カレーも好きです」

「言うねえ」

いいチャンスではあつたが・・・迷いも生じた。

(空は自力で行くもの)

オレの中に・・・そんな概念があることに気が付いたからだ。

(全く・・・思い出つてヤツは・・・)

・・・  
・・・  
・・・

「失礼します」

「入れ」

「はい。・・・只今戻りました」

「ご苦労、大変だったそうだな」

「いえ、」

「・・・まあいい。いい経験だったと思え」

「はい」

「只今をもって、訓練の終了を命ずる。それと有給の件だが、許可する」

「ありがとうございます」

「2年分の有給を一気に消化するとはね。故郷にでも帰るのか？」

「・・・そのつもりです」

「ホームシックか？」

「・・・そうかもしれない」

確かに・・・恋しくなった。

「下がっていいぞ。楽しんで来い」

「はい」

オレはずっと、「その時」を待っていた。過去に戻れない分、それ以上の未来を創る為に。

(先ず・・・楽譜を買わないとな)

## 幽玄の風

### 幽玄の風

「近年、話題になっている生ゴミ問題ですが、最近はその生ゴミを堆肥として有効活用しようという活動が、盛んになってきています。生ゴミで溢れかえっている国が、それで生まれ変わったという事例も・・・」

真夏を吹き抜ける風。カーテンが揺れるたびに、眠気を誘われてしまう。

「え、堆肥を作る過程は一次発酵と二次発酵という段階があり・・・」  
「カーテンが手招きしているよ・・・」

「他にも、バイオ式、という微生物を利用した方法もあります。これは室内でも出来、寒冷地でも可能な方法で・・・」

（なんだかなあ・・・）

こういう、既に知っている内容を改めて習うのは退屈極まりない。（そんなの知ってるってば）

原理も方法も、私はとうの昔におじいちゃんに教わっていた。

（柔らかい・・・風）

木造校舎に、風が迷い込んだ。教室を自由に彷徨い歩き、ぼわっとしている私を何度も撫でていく。

（空に・・・吸い込まれそう）

体が浮かび上がるような感覚。風に乗って旅立とうとする意識を、私は引き止めなかった。

「……、……、」

遠くで怒鳴り声が聞こえる。

「……っ……」

頬に触れるカーテンを払いながら、窓の外に目を向けた。そこには、自転車を二人乗りして颯爽と駆け抜ける、あの時のシーンが。

風に乗ったように、みるみる先生を引き離していく。

私は頬杖を突いたまま、教室を見回した。瞼に広がる懐かしい風景。それと、学校を飛び出して空っぽになった、二つの席。

(そういうの……あつたなあ)

「……夕、」

辺りが白んでいく感覚。揺れる体が、心を脅かす。

「美夕、起きなって」

ハッと目を覚ますと、目の前にクラスメイトが数人立っていた。

「……ん？」

「授業、もうとっくに終わったよ」

「……そう」

体が浮かんでいるようだ。火照った手で顔を擦ると、手よりも暑い体温が伝わってきた。

「もう夏休み気分？」

「珍しいね、あんたが居眠りなんて」

「……ん……？」

肩を張り、背伸びをすると、心地良い浮遊感が私から抜け出ていった。

「昨日は遅くまで起きていたからさ、そのせいだよ」

「男？」

「まさか、もつといい事」

何処にでもありそうな女子大生の会話を交わしながら、私は校舎の外を眺めた。当然、自転車に乗った二人はそこにはいない。

「帰ろうか」

徐にカバンを持ち、私達は学校の外へ。そして校舎の裏にある駐  
車場へ。

「美夕も買ったら？原チャリ」

「考えたことはあるんだけどね」

「自転車の方がいい？」

「まあ、便利だし、タダだし」

それだけじゃなかったけど・・・言う気にはなれなかった。

「じゃ、またね」

と、手を振って私たちは別れた。白い煙を吐き、長い髪を靡かせ  
て、バイクは走り去っていく。

(・・・私も帰ろう・・・)

スポーツに勤しむ人達の声と、恋人を待つ人達を尻目に、私はペダ  
ルを踏みしめた。

照りつける道路を走り続けていると、園児を乗せたバスが私を抜  
き去って行った。この場所に差し掛かったときに、このバスとよく  
出会う。

バスの後ろの窓から、私に向かって園児が手を振る。私はペダルを  
力いっぱい踏みしめ、バスを追いかけながら手を振って答える。信  
号の無いこの道路で、バスが見えなくなるまで、それは続く。

私がつった作物を食べ、この子達は大人になるのかもしれない。大  
地の恩恵をその小さな体に宿し、歩き、巣立っていく。  
そう思うと、笑みが零れてくる。

「大人になったら何になりたいですか？」

卒園の前に、そんな質問に対して文章を書いた記憶がある。私は  
ただ一言、



「魔女」  
と書いた。

私にとって魔女とは、実在する人だった。それは、私のおばあちゃん。

夜の星空を見上げただけで、明日の天気を言い当てたり、風の匂いを嗅いだだけで、雨が降ることを言い当てた。

体を触っただけで病気が分かったり、山にあるものだけで薬を作ったり。その姿は、私にとって魔女だった。

その不思議な力に憧れた私は、夏休みや冬休みになる度にここへ通い、その魔力を習おうとした。いつの日か、遠い未来でもいい、私も子供や孫に「魔女」と呼ばれてみたい。

おばあちゃんが魔女なら・・・おじいちゃんは？

(・・・職人かな?)

匠とも言える。

おじいちゃんは私をよく山に連れて行ってくれた。そこで木登りを教わり、草笛を覚えた。蛇の捕まえ方も教わった。

(役に立ったことは無いけど)

山に行くとおじいちゃんは、背負ってきた籠に枯葉を詰め込み、家へと持ち帰った。それを畑の土に混ぜた。不思議なことに、そうやって作った土は踏むとギョツと音が出る。私は面白がってよく踏んでいた。

夕方は二人で紙飛行機を作る時間。

私の作った物が空を飛ぶ。そのことに、私は言い表せない感動を覚えた。テラスから見える景色が白で埋め尽くされるまで、私は紙飛行機を空へ送り出していた。風に攫われても、風凧を突き抜けても、感動が生まれていた。

(今思えば・・・それが始まりかも)

二人は私と違って、大学にも高校にも行っていない。それでも二人は農家をやっている。誰よりも素晴らしく、だ。

(自然から学んだと、よく言っていたっけ)

そんな二人は、今では私の先生である。どんな講師よりも優秀な先生。誰よりも、私を導いてくれる。

3人で人力飛行機を作った夏。その夏を過ごした家にもう着く頃、風が静かになった。

こんな風が吹くと、とある映画を思い出してしまふ。この家とよ似た家が出てくる映画だ。それを思い出すと、途端にここが異国に見えてくるから不思議です。

「・・・」

ポストの前で自転車のスタンドを立てる。

おじいちゃんが作った手製のポスト。地面に杭を打ち立て、その上にポストを固定させたもの。

「・・・」

私は毎日、学校から帰ると先ずポストを覗く癖がついた。

(・・・あいつのせいだ)

一度も届いたことのない便り。今日こそは、今日あたり、今日はきつと、と期待を抱いて空のポストを開ける日々。

(こんなの・・・私らしくない!)

と思っても、やっぱり開けてしまふ日々。

(・・・バカみたい)

と、口を尖らせる。やきもちに似た感情が私の中に芽生えた。

(開けてやんないから!)

と、杭を蹴とばした。そしてポストを開けずに、私は家に入った。

2階にある自分の部屋に入り、服を脱ぎ捨てて着替える。そしてすぐ、ベッドに飛び込んだ。

(・・・こんな気持ち、)

心の声が漏れないよう、枕に顔を押し付ける。

(・・・持たせないでよ！)

私のこんな気持ちとは関係なく、今日も窓から柔らかい風が吹き込んでくる。

(・・・切り替えよう)

私は手を伸ばし、手帳を取った。学校の予定と、農作業の予定が書き込まれた手帳。一枚ページを捲ると、そこは白紙になっていた。

(そっか・・・夏休みか)

それは余計なキーワード。再び、心を駆け巡る恋心。

(くう・・・ん~~~~)

私はペンを掴み取り、今の気持ちを白紙のページに書いた。殴るように、叫ぶように。

(・・・なんだかなあ)

ちよつと落ち着いた頃、私はベッドから体を起こした。

テーブルに置いてある紙飛行機。風が忍び込む度に、カタカタと翼を揺らしている。

(・・・飛びたいの?)

そう語りかけながら手に取る。

(私も・・・飛びたいよ)

空が懐かしい。焦がれながら見上げていた空に手が届いた日。あまりに美しく、褪せない光。人はそんな瞬間を知ってしまうと、そ

の思い出から動けなくなってしまうようだ。

窓辺に立ち、草原を眺める。海の匂いと、風の匂いが私の鼻を撫でた。

(ここを・・・自転車で駆けて、飛んで)  
草原に、あの時の残光が映りだす。

(・・・)  
溜め息を一つ。

「・・・らしくない。らしくないよ」  
前を見て、上を見て、私は生きてきた。

「・・・なのに」  
今は後ろを向いて、下を向いている。

「待つていられない・・・未来がある」  
私は手にしていた紙飛行機を空へと放った。  
風が止み、道を作る。

風の中は紙飛行機を運ぶ。何処までも、何処までも。

(今・・・何処を飛んでいるの?)  
風凧にそう問い掛ける。すると、風が再び吹き始めた。優しい風が部屋に訪れる。

(もうすぐ・・・つて?)  
そう・・・私は解釈した。

「待つていられない・・・未来がある！」  
なら私は・・・。

「・・・やりますか」  
飛行機を造る。また空へ行くために。

海に落ちてから3年。私はウインドベルに改良を加えてきた。初めは、海に不時着した飛行機を思い出し、そのままの形で残しておこうと考えた。だけど、作業場はそんなに広くなく、材料のコストを考えると、やはり改良した方がいいと私は判断した。

そう考えると途端に、

「ウインドベルは一機でいい」

と思うようになるから不思議です。

(3人の合計体重を、170Kとして・・・その分の揚力を生み出さないといけないから・・・)

何度も同じことを考える。

(翼の角度を変えて・・・?いやいや、速度を上げればいいのか?・・・それとも両方かな?)

腕を組み、首を傾げる日々。そういうのは嫌いじゃなかった。

(L11/2CLPV2S・・・だから、)

何度も方程式を見直す日々。

(待つて、そもそもあの時は浮いていた。墜落したのはプロペラが壊れたからだ)

レポート用紙に新たな文字と数字が加わっていく。

(プロペラの耐久度を上げて・・・違う、プロペラと機体を繋ぐ関節の部分を強化すればいいのか。でも・・・その分重くなる。って言うか、みんなの体重はどうなんだろう)

2人の3年後を想像してみる。

(オリンは増えてそうだなあ・・・自衛隊に入って、ますます筋肉質になってそうだな。風は・・・痩せてそうだなあ。ちゃんと食べているのかな・・・?)

手が止まり・・・レポート用紙に映った風の顔を見つめる。

(脚力も落ちてそうだけど・・・)

考えているのはそんなことじゃない。それは、自分でも分かっている。

(・・・はかどらないや)

止まる手に、数字でグチャグチャのレポート用紙。ふと机に目を反らすと、同じような紙が何枚も重なっていた。

結局のところ、足踏みをしているということだ。作業に関しても、昔ほど熱が生まれない。

(あの夏を知ってしまったからね・・・無理も無いか)

と言っても、私の夢は変わっていない。この翼で、世界記録を破ることを。

(3人で・・・やってみたい!)

人力飛行機の世界記録は116km。それを今度は越えてみせる。

(・・・っと、もうこんな時間)

夢を追う時間は、不平等と思えるほど速く感じる。

照明を落とす前に、ウインドベルを眺める。実のところ、一人で出来る部分は全て終わっていた。後は、メンバーが揃わないと先に進めない。私もウインドベルも「その時」を待っているのだ。

家に戻る途中、夏の風が草原を吹き抜けた。髪を抑え、その行く先を見つめる。

(あの夏と・・・同じ風だ)

ふとそう思う。そして気がつく。

(・・・ポスト)

帰宅した時に蹴とばしたポスト。そのポストに何かが挟まっていた。

(・・・?)

近づいてみると、それは紙飛行機だった。夕方前に、窓から投げた紙飛行機。

(・・・開けるって?)

仕方がないなあ。といった強がりを見しながら、私はポストに駆け寄り、紙飛行機を摘み上げてからポストを開けた。

そこには、夏の思い出が届いていた。

## 夏の美風

### 夏の美風

「・・・変わってねえな」

開け放たれたバスの窓にそう呟いた。

「・・・」

ここは記憶どおりの世界。風の匂いも、潮の香りも、

「錆びたバス停も」

バスが停車し、車内にアナウンスが流れ始めた。聞き取りにくい声を聞きながら、オレは荷物を持ち、バスを降りた。

迎える風はあの時と同じ暖かさだった。

（・・・さて、）

褪せていない景色を歩き始める。赤い屋根の、ポーチがある家を目指して。

「・・・おっ！」

胸が高鳴り、その躍動を感じ取る。

「楽しくなってきたよ！」

足取りも軽くような感じだ。

（ガキじゃあるまいし）

走りたい感情を抑えながら、自身にそう促す。

家の前に立ち、赤い屋根を見上げる。心に湧く、帰ってきたという感情。特別な感慨深さに、オレは思わず笑みを零した。

（・・・）

ペンキが剥がれかけた、3段しかない階段を登る。軋む音すら懐かしい。

ポーチの隅にある白いテーブルと椅子に目を向けたまま、オレは



玄関の前へ。そしてノックする。

「・・・」

返事が無い。

もう一度ノックする。

「・・・美夕？」

呼びかけても、風の音しかしない。

「・・・」

ドアノブを掴み、引いてみると、何の抵抗も無くドアが開いた。

「・・・美夕？」

ドアの隙間からそう呼びかけたが、返事は無い。

「・・・入るぞ？」

オレは忍ぶように足を踏み入れた。

部屋は昔と変わっていない。家具も、雰囲気も。

「・・・っと」

ソファに横になり、眠っている美夕の姿に気が付いた。

「・・・」

スヤスヤと寝息を立てている。

(眠れなかったか？・・・オレと一緒にだな)

「久しぶり」

小声でそう伝える。

ソファの向かいのテーブルには、あの夏にみんなで取った記念写真が置いてあった。4つに折られ、ボロボロになっている、あの時の写真。

その脇に置いてある、開かれた手帳には、

「バカ」

と書いてあった。その字は乱暴で、何度もなぞられていた。

(やれやれ・・・)

オレは音を立てずに荷物を置いた。

(置かせてもらうぞ)

そう心で語り、オレは外へ出た。

ポーチに置いてある椅子に座り、柵越しの草原を見渡す。何ら変わりの無い様子に、どこか安心を感じる。時代は移り変わっても、ここだけは変わらないだろう。

(そういうの・・・いいよな)

と、心で念じながら、オレはテーブルに楽譜を開いて置き、風に飛ばされないようハーモニカのケースを置いた。

そして静かに、奏で始めた。

(・・・風の音)

草原を吹き分ける、風の音。

恵みを届ける、風の音。

暖かさを贈る、風の音。

薄目を開けると、その音はより鮮明になった。

(・・・眠っちゃったんだ)

目を擦り、窓に目を向ける。するとそこには、風の奏者がいた。

(・・・ふう)

「・・・新しい趣味？」

「まあな。色々あって、やってみることにした」

「・・・久しぶり。オリン」

「久しぶり・・・美夕」

オリンと会うのは卒業式の日以来だった。親しい人と、そこまで別れたことが無かった私は、少し不安だった。面影すら残ってなかったらどうしよう、と。そんな事は無いと分かっている、不安は

消えない。そういう感じだった。

けど・・・やっぱり無駄だったみたい。目の前にいるのは、紛れもなく、オリンそのものだから。

「起こしちゃったか？」

「いいの。出迎えようと待っていたところだったから」

「・・・そうかい」

「入って。ほうじ茶入れるから」

「悪いな、先に荷物を置かせてもらった」

「いいよ、全然」

と答えながら、私はテーブルに置かれていた手帳を素早く閉じた。そしてチラリとオリンを見ると、

(もう遅い)

という顔をした。まあ・・・隠すつもりは無いけど・・・それでも、ね。

「土産がある。最近山岳訓練で遠くに行つてな、その地ビールだ」  
オリンはそう言って瓶ビールが6本入った木箱を私に手渡した。

「来る時に1本飲んだけど」

見ると確かに、1本空き瓶が混じっていた。

「地ビールとか興味あるかと思つてな。そういうのは造らないのか？」

「大学で勉強はしたけど、そこまで手は伸ばせないよ」

「人を雇えよ。風来坊なヤツ」

私達は笑い合った。たったそれだけなのに、不思議と空白の時間が埋まっていった。

「その写真、お前のじゃないだろ？」

受け取った湯飲みを持つ手で、オリンがテーブルに置かれた写真を指差した。

「そう。あれは風が持っていた写真」

私は写真を手に取り、オリンに手渡した。

「・・・ボロボロだな」

「裏、見てみなよ」

言われたとおり、オリンは写真を裏返した。

「・・・エアメールか」

「手紙の代わりにしたんだよ」

「I'll be back soon. すぐ戻る、か。届くモンだな、こんな手紙でもよ」

凧らしさ。を思わせる行いだと、私は思った。

「夕飯、何がいい？」

「イノシシ以外なら何でも」

日が暮れるにつれ、美夕の気持ちはどこか落ち着かなくなっていることに、オレはふと気が付いた。食事をしている最中も、気持ちがザラついていつような感じが見受けられた。

考えてみれば、美夕がダイニングで人を待っていること自体、そ

の現れだったのかもしれない。・・・居眠りもそうか。

(人を待つって・・・楽じゃないんだな)

「おかわりは？」

「いや、大丈夫」

何か喋るたびに、目伏せるような感じになる。

(・・・)

「あいつは3年間、全く連絡をよこさなかったのか？」

「・・・ん。オリンにも？」

「まあな。つつても、オレは家を出たし、教えようにも連絡がつかないからな」

「・・・私も同じ」

大方、携帯があるから大丈夫と考えていたのだろう。

とは言え、もうすぐ帰ってくると便りを出したんだ。再会の時はすぐに訪れるだろう。

「会ったら、何て言うんだ？」

「え？」

不意を突かれたように、美夕はオレの顔を直視した。オレは堪らず目を逸らした。

「やっぱり、考えておくものなの？」

「あ、さあ？聞いてみただけだ。別に必要ないんじゃないか？」

「そう？・・・そう」

余計だったらしい。

「やあ？久しぶり？お帰り？こんにちは？元気だった？・・・何だかね」

鼻で笑いながら溜め息をつく美夕。

（・・・何だかな）

「あのよ・・・振っついてあれなんだけど、その時の気分がいいんじゃないか？」

「その時？」

「言葉に正解なんて無いし、考えたとおりに言えるほど人は単純じゃない。だったら、その時の自分に従えばいい」

そう言うと、美夕は目を細めながら首を傾げた。そして鷲掴みするように拳を握った。

「・・・掴みかかるかも」

「それもいいさ」

ようやく、美夕が笑った。

（・・・それでいい）

「休みはいつまで？」

「1ヶ月位だ。その間に、もう一度空を飛びたい」

「それは大丈夫、抜かりないよ」

「頼もしいねえ。流石だ」

「私だって、この時を待っていたから」

心の奥にある密かな決意。あの時と変わらない光を、今も抱いている。

「次の風を待つなんて・・・オレ達らしくないからな」

同じ夢を見る。そんな瞬間を感じるのは、やっぱり心地良い。それに、軽くなる。

「ところでさオリン、お父さんには勝てたの？」

「ああ？ああ・・・」

飛行機の整備をしながら、オリンは口を濁した。

「ここへ来る前に家によつて挑んだけどな、ダメだったぜえ・・・」  
オリンの夢は空を飛ぶより難しいらしい。

「現役軍人に勝つなんて、どうかしてる。やっぱモンスターだな」  
夜の作業場に笑いが木霊した。

「でもさ・・・もし、勝っちゃったらさ、その後どうするの？」

「どうした？急に」

「夢を叶えた後つて、心にポツカリ穴が開くじゃない？」

「確かに、3年前に空を飛んだときはそうだったな」

「その先を、オリンは考えているの？」

「別に・・・考えてない」

そう答えながら、オリンはペダルを漕ぎ始めた。連動してプロペラが回り始める。

「考えてないけど、きつとまた挑むだろうな。挑み続けて、勝敗に関わらず、強さの意味を少しでも知ることが出来れば、それでいい」

強さの・・・意味。

「何も知らない異国を歩く強さとか、家を出て学ぶ強さとか、何がそうさせるのか、知り尽くすには命が短すぎる」

「探究に終わりはない？」  
「そう、それだ」

挑み続ける人生。  
学び続ける人生。  
知り続ける人生。

同じ教室に座っていた人達が、今は別の世界を歩いている。  
当たり前だけど、改めて考えてみると感慨深い。  
そして、不思議だ。

「どうよ？プロペラの回転数は？」

「上々、問題なし」

「おおっし！」

席を飛び降りるオリン。

「で？次は？」

「はいこれ」

私はペンキの入った缶をオリンの胸に押し付けた。

「塗るのか？」

「名前だけね。あの時海に落ちたのは、名前をペイントしていなかったからだよ」

「そんなミスが招いた結果だったのか！」

それが終われば、飛行機は完成。後は風を待つだけ。

「こういうの、実は得意なんだ」

「へえ、初めて聞いた」

「オレは陸上隊に所属しているんだけどな、戦車に「オレの」ってペンキ塗ったらよ、えらい怒られてな、3ヶ月間の減給処分を喰らった程の腕前だ」

「・・・それは凄い」

それぞれの道が交差する。ここは、そんな場所であってほしいと思っただ。その場所を守り続けるのも、私の夢なのだ。  
永遠に終わらない夢。

(空と・・・同じ)

草原に置かれた人力飛行機。風を感じながら、その時を待っている。オリンは飛行機の中で、美夕は羽根の上で、共にその時を待っている。

草が揺れる音。

風の通る音。

景色に溶け込むようなハーモニカの音が草原に響き始めた。その音を待っていたように、風はその身を潜め、草原は静まり返った。

オリンの奏でる叙情に、耳を澄ます美夕。そして気が付く。あの夏に聴いた「渡り鳥」という名の曲であることに。

静かに心が捲られる。開かれたのは、あの夏の情景。

耳を傾け、目を閉じ、少し俯きながらその景色を見渡す。

高鳴る胸に目を開いても、見えていた景色は変わらない。

旅人を誘う風が吹いた。草原を吹き分け、道を示すように。

その風を、二人は目で追った。

懐かしい足音がハーモニカと共に草原に響く。そして声が届く前に、美夕は駆け出した。



オリンは目を伏せ、二人の時を想い、奏で続ける。

目を合わせながら、美夕は唇から息を漏らしている。

二人が呼び合う声は、風に攫われた。

美夕は今の感情に、自分の心に従い、凧の胸元を両手で掴んだ。  
でも・・・言葉が出ない。

「・・・ってる？」

「・・・でしょー!」

「・・・たよ」

「・・・って、私が・・・思う？」

「・・・くて、帰って・・・」

「もう、何処・・・ない？」

「・・・ないよ。美夕・・・にいる」

「・・・スして・・・たら、信じてあげる」

「・・・喜んで」

演奏が終わるまで、その瞬間は続いた。

最後の一音が風に消えると、3人は翼の下に集った。夢の続きを追う為に。

その道を示すように、風が空へ飛んだ。目で追いながら、それぞれが想いを言葉にした。同じ言葉。同じ想い。

「風は・・・止まない」

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、夕テ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0401t/>

---

夕風

2011年5月6日01時25分発行